

三易由來記序
 昇平二百有餘年。



皇化浹于民。擊壤鼓腹之澤。洋溢于海內矣。當是時。賀茂本居二家。復古之學。浸々然。日新月熾。苟志古學者。僉靡不_下沿其流。溯_中其源者。然_下而間有蜂衙螳垤之群。管窺蠡測。

之徒。動誇于異邦。篡奪之王位。而
議我萬古不易之

天統。豈可不慨嘆乎。蓋斯病也。數千
年間。沈淫于膏肓。而雖使扁倉華
復出。無之奈何耳。何則。儒之所謂
聖者。有真有偽。真則上古神聖。繼
天立極之類。而堯舜且猶病之者。

則謂聖。謂聖之一言。有千鈞之威
重。至後世不能間然也。三代以降
稱聖者。則因魯叟鄒兪。一時媚稱
其德。誣譽其善。而得名者。豈得為
真聖乎。是以太昊伏羲氏之卦爻
方位錯亂。遂有連山歸藏周易之
三編。相傳雖多。以其道名于一世。

者。僉以見欺。罔於姬昌之姦術。而
未嘗有知其篡奪之讖記者矣。今
也。赫ル

天極參神之嚴鑒。不容於厥隱。逆下
乎天機自然之命。而教平田翁有
是撰也。翁嚮所論八家之一。所與
易者不知易威者。而八卦之蘊奧。

三易之異同。及諸家之說。其是非
得失。辨如懸長川。論如輪迅雷。昭
乎。亦皆不能遁其情。三千年間
之朦霧。一朝而披拂。太昊氏微妙
之真方位。燦然復明于世矣。學者
讀是書。沈潛反復。一旦恍然。有以
得其要領。則太昊氏之真旨。支分

節解與我

神洲之古傳無異。豈俟余言哉。遂書
為序。嘉永元年。初秋。三河。岡山中。
神祠。宮司。竹尾源正。跋撰。豐前。岡
宇佐神宮。與並。繼書。

三易由來記卷上

大壑 平篤胤撰述

人門

駿河岡 新庄道雄
武藏岡 碧川好尚
常陸岡 竹來道彦

同校

古者庖犧氏出王天下也。仰則觀象於天。俯則觀法於地。觀
鳥獸。出文與天地。出宜。近取諸身。遠取諸物。於是始作八卦。
以通神明之德。以類萬物之情。

此第一條を繫辭傳ふ採りて出せり。普通の本ふち地之宜
熹ぐ本義ふ。與地之間。諸本多有。庖犧氏はと太界伏羲氏
天字と云ふるふ依りて補す。彼
をも稱ふ。宗ふは我が扶桑本州に神眞大岡主神れるが。

赤縣州^{モロコシ}に渡^レり往^カして罔^ヲを闢^キ。彼處^{カレコ}に志^スし王^ヲを爲^スして。其蠱^ヲ民^ヲらふ始^ニ多^ク三才^ヲに道^ヲを傳^フむと。天地萬物^ノの易道^ヲを觀察^{シテ}。八卦^ヲを作^リ、授^ケて賜^フる事^ヲ。赤縣太古傳^及び此^ヲ記^ス。本編^ハ委曲^{ナル}說^多まむ。今更^ニ云^ハは^ズ。本編^ハ太^ニ古^ニ傳^ヲを云^フ。下^ニおまよ^シ。是^レ記^スるは其授^ケて遺^シ賜^フる事^ヲ。易法^ノの後^ニ連^ル山^ノ歸藏周易^ト云^フ。三易^ハ爲^スまる由來^ヲ論^フが故^ニ。か^ク名^ヲ付^ケる也。前^ハハ思^フ旨^有りて、易學^三千^年論^ト號^ス。けしうど再^ニ思^フ旨^有りて、か^ク改^メと^ス。ち^テ本文^ハ始^ニ作^ル八卦^ヲ云^フを言^ハふ。河^ヲを圖^ヲを出^シ。洛^ヲを書^ヲを出^セ。其象數^ハ則^ヲを取^リ。於^テ仰觀俯察^{シテ}。ま^カ八卦^ハ經卦^ヲを作^リ。其^ハ八節^ヲ合^セて乾坤震巽坎離艮兌^ハ名^ヲを命^ジ

て。本命^本卦^ノの定則^ヲ示^シ。八索^{シテ}は自然^{ナル}を以^テ吉凶^ノの應^有る事^ヲ。ま^カ其別卦^ハ六十四^ニ。各^々其^ノ名^ヲを命^ジて。大象辭^ヲをも定め。亦^ハ其每卦^ハ六十四變^ヲを索^メて。其時變^ヲも稽^ムふべき筮法^ヲ立^テる事^ハは^ズ。含^蓄しむ心得^有るし。此^ハ本編^ニ。易^ハ出^ル乾坤^ヲ以^テ窮^メ道^ヲ通^ス意^也。八卦^ハ可^シ以^テ識^リ吉凶^ヲ。知^ル禍福^矣。然^レ而伏羲^ハ爲^シ出^ル六十四變^ヲ。周室^ハ增^シ以^テ六爻^ヲ。所以^ニ原測^シ淑清^ヲ。出道^ス而擲^ス逐^ス萬物^ヲ。出^ル祖^也。此^ハ第二條^ニ。淮南子^ハ純要畧^ヲ採^リま^シ。抑^カの篇^ニ。劉安^ハ既^ニ淮南子^{二十}篇^ヲを作^リ。畢^シて後^ニ。其書^ヲを著^セる用意^ハ。人^ヲ

えて凡とゆ博ふ致し。粗と巴精ふ致さる。體裁せは由字
述るる自叙あり。然まむ其篇首。夫作爲書論者所以紀綱
道德經緯人事上考出天下揆之地中通諸理雖未能抽引玄
妙之中才繁然足以觀終始矣。總要舉凡而語不剖判純樸靡
散太宗懼人之惛々然弗能知也。故多爲之辭博爲之說又恐
人之離本就末也。云々言ひて。今は本文を出せり。著書純
用意はあやふ如此有べき事ふこそ。己の三易由來記を撰
考する此訓を効ふ
やしも無まど。易の起原は伏羲氏ふ作れは事とゆ延交て
連山歸藏周易は三つふ變轉せる次第を論じある趣の所思
相似とるも甚奇くこそ。けて易之乾坤足以窮道通意也と
た。唯り乾坤とけ之言牙まど。此を父母を云ひて。震巽坎離

艮兌の六子を含蓄せふて。周禮を謂ゆる經卦。乃かは三
爻小成は八卦を云ふ也。易の乾鑿度は乾とけみ云て父
母六子は八卦を兼たる文も有り
文意を其小成は八卦をて。三才は道を窮め。天下は意をも
通さるふ足ふとれ也。○八卦可以識吉凶知禍福矣。八卦
をは此ふて。周禮を謂ゆる別卦。乃か純六爻大成の六十
四卦を云ふ也。六十四卦を直ふ八卦と稱する文意を小成
事ハ本編了已ふ委く説とべき
は八卦をて。道を窮め。意を通さるふ足る哉。更ふ重卦せる
六十四卦を以て。吉凶を識り禍福を知は道をも始れしと
云ふ也。○然而伏羲爲之六十四變を。高誘註ふ。八を變爲
六十四卦。伏羲示其象と云ふを然る言ふて。彼別卦六十四

を以て吉凶を識^レす。禍福をを知る不足るを又その八々六十四卦がとる。六十四卦變象をある法を示せる由ありて。是謂^ルもる變爻法あり。前此^ニ經卦別卦の事あり。伏羲と云。經卦及び別卦を伏羲の舉^ルがら始^メて伏羲と云。予まむ其此^ニ意をたら。每卦六十四變は法も伏羲氏より起れる由を云むと欲^スある故に。名字^ノ。○周室増^ス以^テ六爻を。高誘注る。周室謂^ク文王也。と云。依如く。伏羲氏の一卦六十四變は法あるよ。周文王が心せ。ま^ニ更^テる每卦一爻一爻は判斷を増^シ始めて。其占^ルはさ^ニ牙^ヲ立^テる由あり。此^ニ論ふ^ニ見^テ知^ルべし。ち^ニ是^ニとめ^テ下^ニは文意を。ち^ニ次々^ニ小^ニ増益^シ來^レれ依事^ニ。淑清の道を原則して。萬物は本祖を。擗^テ逐^セむ為^ルあり。と言^ヒて。上^ニは

夫^レ作^ル為^ス書論者云^ク。云^レ依^ル文を結^ビ。其^ノ子書は凡^レと博^ク致^スせる證例と為^ルるあり。淑^ク善也。濼^ク清也。澄^ク也。潔^ク也。擗^ルを窺^ルむる義あり。然^レまむ八^ニは經卦の作^ルを更^テあり。其^ノ字^ヲ重^クせ^テ。六十有四^ニは別卦を爲^シして。各々其^ノ卦名を命^ジ。は^レ其^ノ別卦の。各々六十四變を爲^スる筮法。及び其^ノ大象は辭^も何^も。其^ノ原^{モト}を伏羲氏より出^ルる不^レ疑^ハひ無^クあり。予^ニ本^ニ編^ル論^ヲ合^セて考^テす。其^ノ旨^ヲ。是^ニを以^テ晉^ノ王弼^ノが易註^ル。伏羲重卦と云^ヒ。唐^ノ孔穎達^ノが正義^ル。其^ノ說^ヲを用^ヒて。重卦出人^ノ諸儒不^レ同^シ。凡^レ有四^ノ說。王輔嗣^等以^テ爲^ス伏羲重卦^ト。王輔嗣とハ王弼あり。此^ニを必^ズ必^ズ淮南子^ノの說^ヲを據^ル。鄭玄^{出徒}以^テ爲^ス神農^ト。此^ニを必^ズ必^ズ易積算法^ノ。孔語^ヲあらむ。出^ルと^ル說^ヲあり。次^ニ條^ノ引^クを

見る孫盛以爲夏禹ハハ何ハ史遷以爲文王史説
をりも古く何くまの書よ所見とまど。乾鑿度云垂皇策者
誤まる説あり第五條云ふを見ゆし。乾鑿度云予が本編
犧用著在六爻出後即伏羲己重卦この乾鑿度云予が本編
ふた非也謂ゆる乾坤鑿度と云ふ物れ今依輔嗣と言子也。
此書のこと第九條云ふを見ゆし。今依輔嗣と言子也。
此説字用ふゆし。王應麟が王海朱震云論重卦者六家王
雄司馬遷曰文王孔穎達陸希聲以彌爲是と有も此意あり。

三
庖犧氏没神農氏作日中爲市致天下之民聚天下之貨交
易而退各得其所。

此第三條を繫辭傳ふ。庖犧氏始於て八卦を作する事云
る條を接せる採探ま也。但し此を用ゆべき文を。庖犧氏没を

云は没え。出る對せる言ふて。日没は没る同じ。抑太界庖犧
氏を。えと皇國の神眞大國主神を坐す。彼國人を教導せ
む爲る。暫し彼處より出現して。其功竟て皇國を歸り給ふ也。
其をかれ方言ふ没と云はあ也。然るよ秦漢以來あの古方
は事とのえ心得とるハ甚く悞る。此等此事とも委くハ
赤縣太古傳ふ論子まバ今更ふ云は。大扶桑國攷るも。そ
れ大概を。ちて太界氏は隱没せるれち。追次むて神農氏は
作する非也。其間ふ出とる數氏はまど。然しも大さ功績
を無べき。然るも彼國は固柄をして。人情固をも薄惡あま
ば。伏羲氏の教子漸々爾類まで。はと猥亂るれり以來しを。
神農氏を。伏羲氏は彼國を生遺せは數子に中ふ。少典と云

むしぐ子ふて。炎帝をも稱ふ。聖徳の人なりし故ふ。祖聖は遺法を受行ひて。種々教導を爲せり。その教導せる事としき考すは太古傳を註しよと別る太古傳此系図と云ふをも著せまむ。其書等よ就て見るべし。ちて文面は如く都市を爲して。民を致し。貨を聚めり。交易は道は始絶し事を勿論あるが。此交易を云ふ。易法の交易を成せ。依義をも兼説ふは傳あり。是を以て司馬貞が補史記ふ。教入日中爲市交易而退各得其所。遂重八卦爲六十四爻と云ふ。羅泌が路史ふ。於是通其變。八々成卦。良以爲始。所謂連山易也。故亦曰連山氏と云ふ。若こ此本文易説を兼とる。非と爲る。繋辭傳ふ。包犧氏の八卦を作する事を載せる。次ふ。此條を出せること。何れ由もあき。徒事なり。此條の次ふ。黄帝此事を出せるよ。

變通の事を載せまむ。易説あること云ふも更あり。然らむ其易法は交易とは何なる。趣れらむと言ふ。王應麟が玉海ふ。連山首良者。八風始於不周。實居西北之方。七宿之次。是爲東壁。營室於辰。爲亥。於律爲應鍾。於時爲立冬。良震巽離坤兌乾坎連山之序也。と見え。此玉海ふ。王洙曰。とて出せまむ。決然て古連山易は遺説あり。其良を西北不周山の方ふ居處と有るが。太界氏の古易は眞方位あり。曾て周易ありし以來の人れどの。思ひ寄べき事。非ざるを以て辨ふべし。古方位よ。良は西北れる事。本編ふ。季く。晉は皇甫謐が帝王世紀ふ。夏人因注せるを視て察おべし。炎帝而曰連山。連山易其卦以純良爲首。夏以十三月爲正。人統良。漸正月。故以良爲首。如見え。抑太界氏の卦順む。乾坤震巽坎離良兌あり。然るを神農氏右は如く。唱子は次

第を交錯せる故也。交易とは傳子にむ。然まど其を唯卦
順に唱子也。交易せる耳。其卦々は方位を易ある
義を非交。思ひ紛ふ事多し。其ハ太畧氏の易も。艮此
易も。艮居西北方と有る一を以て。餘の七卦は方位も。ま
易ざる事多し。辨ふべし。然るも玉海も。連山乾始於子
坤始於午。至周易尊乾卑坤。其卦
乃定と云るを心得ぬ事あり。 ちて此交易せる傳子を重
卦の事を思ひ誤して。彼京房が易積算法。孔子曰。八卦因
乎伏羲。暨于神農。重乎八純。聖理玄微と云。はを始也。此文
玉海及
易博士淳于意が言ふ。包羲制八卦。神農演之。爲六十四卦。
皇甫謐が帝王世紀も。庖犧氏作八卦。炎帝重八卦。之數究八

ハ之體爲六十四卦。お言ひ。上を引く補史記も。重八卦
爲六十四爻。を見えまど。まと同作の史記索隱。此等此諸
説に誤りあり。其を前本文を舉ぐる淮南子に文あり。伏羲
爲之六十四變と云む。王弼註も。伏羲重卦と云。はが正説
あり。既ふ委く論ずる如く。はと玉海も。薛氏曰。神農氏初
經本包羲八卦。蓋八卦成列。而六十四具焉。神農氏因之也。
有るが如し。然るも隋志に五行類也。神農重卦經二卷と云。
托せる。ちて此易を連山易と稱する義を。世紀も。連山易艮
爲首。艮爲山。山上山下是名連山。を云るが如し。然まど神農
氏を。はと連山氏とも稱ふ。此易法を立るる故あり。是を

以て路史ルシも良ヨシ以爲シテ首ト所謂ハ連山易也故亦曰連山氏と云
予レ也。鄭玄ト說シ連山象山之出雲連々不絶と云ひ世紀ヨま
をレまる列山氏とも厲山氏とも諸書ル所見ルある然ルる周
禮ニ註ス杜子春云連山宓戲ト言フ王海ル王洙曰山海經
云伏羲氏得河圖夏后氏因之曰連山と云ハ協ト甚シ非ヒ說
也レ殊ニ爾山海經ニ此レ文レ加テ彼書ル有ル必シ說トも
覺スえぬ事ル也レ然レれど此レ說ヲ路史ノ自註ヨも山海經
けテ夏后氏ノ世ニ此レ易法ヲ用ヒ事ニ第四條ニ注シ如
此レ水經ニ注ス連山易曰有崇伯鯀伏于羽山之野世紀ニ
連山易曰禹娶塗山氏之子名曰攸女生余レ也レ有ル協ト夏世

此傳文の偶ク存ルる物ニ也レ然シテ此レ易法も周世まで用
むレ來レ也レ漢以來都小廢ラまテ其レ藝文志よ隋此經
籍志も載サ交テ唐志も始メ連山十卷と出セまシ其レ
隨レ世ニ劉炫と云フ者レ此レ偽作シ也レ賞ヲ求メ物ニ也レ

と玉海を始メ諸書ニ見エ多ク也レ其レ中ヨ委キ胡應麟
藝文志按班氏六經首周易凡夏商之易絶不聞隋牛弘購求
寓内遺書至三十七萬卷魏玄成等修隋志晉梁以降凶逸篇
名亡不具載皆不聞所謂連山者而至唐始出可乎北史劉炫
傳隋文蒐訪因籍炫因偽造連山及魯史記上之馬端臨據此
以為炫作或有然者蓋炫後事發除名故隋志不錄而其書尚
傳于後開元中盛集群書仍入禁中耳鄭漁仲謂此書當時不
存則宋世已無可考今亦未能必其炫也歸藏今
亦不傳故二書惟論其大槩不能致詳と云予也レ

神農氏没黃帝氏作通其變使民不倦神而化出使民宜出

四

易窮則變變則通通則久是以自天祐出吉无不利

此第四條も繫辭傳の前條に接續せるを採まゆ。但し本書

没黄帝堯舜氏作と有きと堯舜黄帝も少典氏孔子也。神

農は曾孫榆罔尔代して作まゆ。困語まよ黄帝記に注よ神

て共尔少典の子尔りと有る然まぜ同母尔は非尔其由を

赤縣太古傳及び三五本國考春秋命歷敘攷ふ委しく云ま

るべし。けりて文意を事久しき時を弊るく或變通して神

化去まを民倦まして之を利と化故り久を持して廢せま。

此易は變通を尚びて天は祐を得る所以ぞと云ふ義尔て。

其變通せば易法を歸藏易と謂ふ。古は雜卦傳の孔穎達が

必皆相襲故歸藏各卦之次亦多異於時と云る意ば其を黃

子あり連山易は出來し事も是尔推考して思ふる也。其を黃

帝傳尔帝取伏羲氏之卦象法而用之據神農所重六十四卦

之義求其重卦之義乃名所制曰歸藏書也と見え。此尔必神

云子あり路史尔於是正坤乾分離坎倚象衍數以成一代之

宜坤以為首所謂歸藏易也故又曰歸藏氏と云は尔て知る

る也。二書此文に似甚く切れて引る。此易法を坤を首と爲

せ尔事を帝王世紀尔殷人因黄帝曰歸藏歸藏易以純坤為

首坤為地萬物莫不歸而藏於其中殷以十二月為正地統故

以坤為首と見え禮記に禮運尔孔子曰我欲觀夏道之杞得

夏時焉。鄭玄云杞夏后氏之後也得夏我欲觀殷道之宋得坤

乾焉。宋殷人之後也得會易之坤乾之義夏時之等吾以是觀

書也其書存者有歸藏。坤乾之義夏時之等吾以是觀

書也其書存者有歸藏。坤乾之義夏時之等吾以是觀

之、ぞ見えぬ也。

立、天地之位、歸藏先、坤、後、乾、首、万物之母、無、闕、

則、无、闕、无、靜、則、无、動、此、歸藏、所以、先、坤、歟、形、と有、也、亦、周、易、

の、正義、を、始め、歸藏、易、此、坤、を、首、と、せる、説、を、數、ふる、も、暇、何、

交、然、ま、ど、變通、と云ふ、也、伏羲、氏、の、易、の、乾、坤、と有、係、卦、順、字、

坤、は、地、お、れ、バ、萬物、之、の、歸藏、に、云、ふ、義、を、以、て、坤、乾、と變

唱、し、其、餘、の、卦、順、を、も、易、る、由、お、り、是、を、以、て、黃帝、氏、は、亦、

號、字、歸藏、氏、と、も、稱、せ、ら、れ、と、路史、云、ふ、云、る、如、し、然、る、も、歸

ふ、也、元、を、り、の、號、お、て、其、歸藏、氏、の、易、お、る、故、お、歸藏、易、を、云

多、と、釈、する、説、を、本、末、お、り、若、こ、此、説、の、如、く、也、歸藏、と

云、る、号、ハ、何、れ、謂、く、由、係、と云、こと、知、登、う、ら、交、姓、と、も、有、ら

ぬ、言、お、る、を、也、は、と、是、に、就、て、思、ふ、も、連山、を、云、ふ、ハ、良、字

首、と、云、は、る、依、ま、る、名、お、る、事、も、お、る、し、神農、氏、を、列山、氏、と

稱、ふ、也、列山、と云、ふ、地、お、る、生、ま、し、故、お、り、と云、ふ、説、有、ま、ど、連

山、列山、厲山、と、同語、の、轉、れ、バ、其、を、連山、易、も、の、せ、る、故、

お、連山、氏、と稱、し、そ、れ、連山、氏、の、生、ま、し、地、お、る、故、お、連山、と

見、む、お、其、本、末、を、正、しく、お、れ、む、ち、て、玉、海、を、朱震、云、歸藏、初

經、者、伏羲、初畫、八卦、因、而、重、之、者、也、其、經、初、乾、初、夙、初、艮、初、兌、

初、舉、初、離、初、釐、初、巽、卦、皆、六、畫、即、此、八、卦、也、八、卦、既、重、又、在、其

中、此、卦、名、と、も、此、事、也、お、不、次、條、周禮、疏、今、歸藏、坤、開、筮、帝、堯

降、二、女、以、舜、妃、又、見、節、卦、云、殷、王、其、囚、常、毋、咎、太、平、御覽、歸藏

云、有、白、雲、自、蒼、梧、入、大、梁、昔、女、媧、筮、張、雲、幕、枚、占、之、曰、吉、昭、々

九州、日、月、代、極、平、均、土、地、和、合、四、圍、黃、神、將、戰、筮、於、巫、咸、明、夷、

曰、昔、夏、后、啓、乘、龍、飛、以、登、于、天、臯、陶、占、之、曰、吉、朱、震、易、叢、引、歸

藏、之、乾、小、畜、如、ど、有、係、を、以、て、其、易、書、に、大、凡、を、知、る、に、係、し、お

帝氏の遺法を免ま。此文等の後、殷世を記せる文は、偶々存れる物に耳。斯て此易法も、周世まで用むしを、其とゆ後を廢らきて、其精説を傳はらば、然る有まど。此易も連山易も、後漢世まづ傳はゆし事を、桓譚が新論を據てぞ知られけし。其を王海の桓譚新論、連山八萬言、歸藏四千三百言と云ふ。其の文字引き、楊慎の外集、連山藏於蘭臺、歸藏藏於大上。此語見於桓譚新論、則後漢時、連山歸藏猶存、不可藝文志不列其目、而疑之。至隋世之連山、則偽作、求賞者耳。と云るが如し。此事を、あ布次、然る隋世も、二書之れ既亡條の末も云ふ。然る隋世も、二書之れ既亡多し。故に其經籍志を、連山は目れく、歸藏十三卷、晉太尉參軍薛貞注と出して、末に歸藏漢初已亡、按晉中經有之、唯載上筮不似聖人之旨、以本卦尚存、故取貫於周易之首、以備

殷易之缺と見え。

此文よ本卦尚存と云るは、かの初、與初、乾

王海の史記正義七録云、歸藏載上筮之書、雜事、中興書目、晉

太尉參軍薛正註、今但存初、經齊母、本著三篇、文多、缺亂不可

訓釋、崇文曰、漢初有歸藏、已非古經、今書三篇不可究矣、と見

え多し。

ま、と胡應麟が筆叢に、歸藏易十三卷、晉太尉參軍薛貞、唐司馬膺各有注、按七畧無歸藏、晉中經簿始有此

書、隋志因之、至宋僅存初、經齊母、本著三篇、鄭渙仲以為其文質、其義古、後學以其不文、則疑而棄之、連山所以亡者、要當復過于此、噫、連山、夏易也、歸藏、商易也、禹貢之文、千古敘事、宗焉、商書簡潔、而明肅、或有過于周者、孰謂夏殷之文不郁々也、隋志稱此書、惟載上筮、不類聖人之旨、蓋唐世固疑其偽、然まど若、鄭以晚出、為辨、則馬端臨之說、尽之矣、と云、牙、

右に書等、歸藏を漢初已亡と云、協説等を委のらば、

次條をゆ、總て論ふを視るべし。

五

宓義氏始畫八卦因而重之爲六十四卦及于三代實爲三易夏曰連山殷曰歸藏周文王作卦辭謂之周易周公又作爻辭

此第五條也。隋書於經籍志亦採焉。

是より先ず前漢の藝文志に宓戲氏始作八卦

卦以通神明之德以類萬物之情至于殷周之際紂在上位逆天暴物文王以諸侯順命而行道天人之占可得而効於是重易六爻作上下篇孔子爲之象象繫辭文言此を宓義氏始序卦之屬十篇故曰易道深矣とも云有り

殷周此三代也及びて分けて三易と爲まは由るて三易の

名也周禮春官小大卜掌三易之灋一曰連山二曰歸藏三曰

周易其經卦皆八別皆六十有四云云と有は是也はと同書よ筭

人掌三易以辨九筭之名と有る注に筭用三易也とも云或説ふ擊辭傳に伏犧氏始畫八卦と云ひて作易を云び而して易之興也其當殷之末世周之盛德邪と文王の始免て易と云ふまじ周礼の三易と有まじ其連山歸藏を易の非交然るは三易を云ふに周易の名を以て名くる也と云ふに繫辭傳を讀みと鹿き故に本編を論ふを視て知はし其經卦とは三畫小成の八卦を云ふ三易とも經卦皆八あり別卦を皆六十有四と云ふに姫昌に至りて始めて重卦せめと言ふ説に無稽あるを言ふも更あめ其に尚書洪範の七稽疑中ふ曰貞曰悔と有は鄭玄註に内卦曰貞外卦曰悔を有を以ても周以前も重卦有しとと著明なり此鄭玄注に洪範に疏を引るを再引るに玉海に葉氏三易辨云とて三易經卦皆八其別皆六十四經者其常別者其変也其爲六十四者自伏羲以來未之有異也と見え日知錄にも重卦不始文王と云ふ條ありて今に周礼の文と左傳に穆

姜グ語トを引キて論リずル。洪範をよそ引ルの終ト共ト予グ意ヲ得ルとル論アリ也ニ。けテ周易正義ニ。三易ニ鄭玄カ易ヲ贊シ及シ易論ニ云ク夏ノ曰ク連山ト殷ノ曰ク歸藏ト周ノ曰ク周易ト連山ノ者象山ノ之出雲連々不絶歸藏者莫不歸藏於其中周易言易道周普无所不備案世譜等群書神農一曰連山氏列山氏黃帝一曰歸藏氏竝是代號周易以文王所演故謂之周易猶周書周禮題周以別餘代故易緯云因代以題周是也と見エ。此鄭玄論予ルと知べシ周易此説ヲ殊ニ非ル也ト。前條案ニ周易此説ヲ釈得多クまシ連山歸藏多代號ヲ據まシと思ふル也ト。本末違ヘル也。上二條ノ云ルを以て辨ふベキ也。路史云夏人因炎帝曰連山商人因黃帝曰歸藏文王廣六十四卦著九六之爻謂之周易或曰連山之文禹代之

作歸藏之文湯代之作周易之文特文王之作至於爻辭則周公而象象則孔子也おシ見ス也ト。象象とシ象傳上下象傳上下を作まス義アリ也ト。けレて卦辭トハ即謂也象辭也ト。毎卦此下也ト。乾元亨利貞勿有咎云也。爻辭とシ毎爻の下也ト。初九潛龍勿用也ト有後因之曰連山歸藏氏之王得河圖殷人因之曰歸藏伏羲氏之王得河圖周人因之曰周易其卦皆六十四文王周公因象十八章究六爻世之傳と有象十八章とハ六十四卦此象辭ヲ作まスルを言ひ究六爻也ト。三百八十四爻此辭ヲ作まス也ト。玉海云姚信云連山氏得河圖夏人因之曰連山歸藏氏得河圖商人因之曰歸藏伏羲氏得河圖

周人因之曰周易と有るを論衡の説を據まりと見ゆるが
共三氏各くふ河図を得たる趣を云ふを誤りなり八卦
の原を伏羲氏の出と傳を三代共ふ其八はて文王姫昌が
卦を襲ひて少く趣意を替へたる形跡を也。はて文王姫昌が
作する象辭を總て六十四章を也。然るも其六十四章を十
八章と云ふ所以を周易上篇は卦數三十。下篇の卦數三十
四あるが。二篇純卦ともふ。二卦おく顛對し。かお表裏反對
せざるも有て。二卦一卦ふ約納するが故ふ。上篇十八卦。下篇
もはと十八卦と成る。其章々を象せる故ふかく言す也。其
顛對とハ屯と蒙。需を訟の如き多云ひ反對を上篇六あり。
乾坤坎離。頤大過とあり。下篇は二あり。中孚小過とあり。是
よて上篇十八卦。下篇もまよ十八卦ふ約納す。其卦々象
せる故ふ。象十八章を云す也。上下篇共よ各十八卦を成る
由はる也。は先輩も既。はて象辭を周公姫昌が作と云は也。
ふ心著とる人有也。死。

周易正義の象辭多文王後事。馬融陸績等以為卦辭文王の
辭。周公今依之而用之。はと鄭衆賈逵等以為卦下之象辭。文
王所作。又下之象辭。周公所作。ふと言す也。然まむ本文の説を。
もや馬融鄭衆等が遺説を據ある説と聞かれど委から也。
其を前後ふ舉る古説ども考ふる也。又辭をも皆姫昌の
かけて云す也。又辭も本姫昌が作す也。創めし也。全く作す
畢さす也。故ふ。後ふ姫昌が其舉をたぎて功畢る也。是
を以て其辭も姫昌後の事も多しと見え也。又辭も姫昌
あとを明の郝敬が周易正解に初見ふいと委曲に記し辨
すとの説あり。其説は較畧を下ふ抄し出るを俟て見べし。
抑周易上下篇ある象辭。又辭は周室に成れは事也。かは淮

南子云。伏羲爲之六十四變。周室增以六爻。と云。依語及む今引出るる文等を更ぬゆ。お不其古説れ多かる中。乾鑿度云。孔子曰。伏羲氏之王天下也。始作八卦。質者无文。以天言此。易之意。夫八卦之變。象感在。人文王因性情之宜。爲之節文。鄭玄注云。九六之辭是也。此文意。伏羲氏始めて八卦を作す。易の意を云ふ。ふまでの事。象の辭。如きは有ら。爻。夫は。豫て一定し難。故あり。斯て後。文王。人。性。情。の。宜。は。因。て。六。十。四。卦。の。節。文。を。爲。す。其。を。謂。也。九。六。は。爻。辭。是。と。易。緯。通。卦。驗。云。慮。戲。一。名。慮。方。牙。蒼。精。作。易。無。書。以。盡。序。驗。曰。矩。衡。神。五。鈴。興。象。出。亡。徵。應。鄭。玄。曰。矩。法。也。鈴。猶。要。也。慮。而。不。書。但。以。畫。見。其。事。之。形。象。而。已。矣。は。と。慮。義。作。易。仲。命。德。維。紀。衡。周。文。增。通。

八々之節轉序三百八十四爻以繫王命之瑞謀三十五君常其一也興凶殊方各有其祥おとも言牙也。仲とて四方を云云。四方。乾坤。坎。離。を。配。し。四。角。を。震。巽。艮。兌。を。配。せ。る。由。て。文。意。を。伏。義。四。方。四。隅。の。八。卦。を。配。し。て。人。の。道。徳。を。命。じ。衡。行。を。紀。せ。し。を。文。王。の。八。々。六。十。四。卦。の。節。々。象。辭。を。増。通。し。そ。の。三。百。八。十。四。爻。は。每。爻。又。爻。辭。を。傳。序。し。我。れ。屬。する。三。十。五。諸。侯。と。相。謀。り。て。其。一。を。常。し。興。亡。は。方。を。殊。し。て。各。々。其。祥。有。ら。し。め。革。命。の。時。を。得。て。王。と。成。べ。き。天。命。の。瑞。を。繫。り。て。民。是。等。の。諸。説。を。照。し。應。せ。て。攷。ふる。よ。信。せ。し。め。と。る。義。也。今。此。周。易。上。下。篇。を。六。十。四。卦。に。畫。象。と。其。卦。名。は。古。昔。に。眞。物。な。り。象。辭。爻。辭。と。も。姫。昌。父。子。が。作。意。の。文。に。る。と。論。ひ。無。し。故。是。を。以。て。其。象。爻。辭。を。王。命。に。瑞。祥。を。係。け。て。殷。の。天。下。を。奪。は。む。と。欲。せ。る。逆。意。の。見。ゆ。る。危。辭。と。も。多。

加_レ己_ノ抑_レ姫昌_ガ殷_ニ天下_ヲ奪_ハむと欲_セる事_ニ一_朝一_夕の事_ハ非_ズ由_リて來_ルを去_ル漸_ルして既_ル古人_モ其_ノ祖父_ハ古_ノ公_ノ單_父と云_ヒし者_ノ時_ヲり其_ノ意_ヲを狹_メりと云_フる如_クふて其_ノ心_ヲ巧_クを姫昌_ニ至_リて大成_ス其_ノ子_ハ姫_發爾_至りてぞ遂_ニたり_ル此_ハ由_ハ第_ハ條_ニ論_フふ_ル見_テ知_ルべし其_レ彼_ハ周易_ノ上_下篇_ハ象_辭字_ヲ作_スる時_ハも是_レを_レ己_ニ早_ク姫昌_ノ其_ノ擬_聖ハ_姦才_字以_テ殷_ニ此_ノ諸_侯を懷_クけ_ルか_ノ論_語ハ_三分_ニ天下_ヲ有_ル其_ノ二_と云_ハ如_ク蠶_食せ_ル休_囚多_ク遂_ニ事_起立_スる_キ體_ハ己_シ故_ル殷_紂王_怒己_テ美_里ヲ_彼字_拘囚_多ゆ_レ間_ハ事_ハ勿_レ也_此を_レ早_ク荀_子ハ_文と云_ヒ史_記の周_本紀_及び自_序ハ_其囚_美里_蓋益_易之_八卦_為六_十四_卦と記_シ朱_熹グ_本義_ハを_レ繫_辭傳_ノ易_之興_也其_レ於_中古_乎作_易者_其有_憂患_乎と有_ル所_ハ註_ス夏_商之_末易_道中_微文_王拘_於美_里而_繫象_辭易_道復_興とぞ云_フ是_レを_レ以_テ其_ノ名_ヲ周易_と稱_シて夏_殷此_ノ易_之名_ヲ異_ル爲_ス

己_レ其_レを_レま_レ周易_{正義}ハ_連山_起於_神農_歸藏_起於_黃帝_周易_起於_文王_乃周_公此_謂周易_也と云_ハ係_字思_ふ也_鄭玄_グ易_贊の_說ハ_周非_地号_周易_以純_乾為_首乾_為天_能周_市於_四時_故名_易為_周周_以十_一月_為正_天統_故以_乾為_首と云_フる_ハ甚_じき_非説_ハち_て古_易ハ_僅々_大象_ハ類_ハる_義理_ハ説_ハる_有ま_象爻_辭ハ_如き_占辭_ハ有_まを_無く_其象_感字_人々_各々_此器_識ハ_任せ_在ける_字周易_ハ至_己て_始て_嚴め_し死_一定_の占_辭を_卦爻_と己_レ繫_具多_クは_上己_レ引_出と_係文_等ハ_灼然_の己_但し_玉海_ハ張_行成_日て_伏義_始畫_八卦_是為_先天_有法_數而_未有_書夏_曰連_山天_易也_商曰_歸藏_地易_也先_絶て_占例_の書_ハ無_己し_趣ハ_云ふ_說有_まを_周易_上下_篇此_如き_事ハ_しき_物と_そ無_リ於_ま少_クの_占例_を載_せる_末書_ども_の有_己し_事ハ_連山_歸藏_の遺_文等_も彼_此見_えは_こ

左傳亦も徃く周易あらぬ占
辞の見ゆるるも所以と也。ちて右三易は占法は趣在春
秋襄九年は傳ふ。遇艮之八云くは注ふ。周禮太卜掌三易。
然則雜用連山歸藏周易。二易皆以七八爲占。故言遇艮之八。
史疑占易不利。更以周易占變爻と有依。正義云。洪範言。二人
占則從。二人之言。孔安國云。夏殷周卜筮各異。三法並上。是言
筮用三易之事也。七爲少易。八爲少會。其爻不變。九爲老易。六
爲老會。其爻皆變。周易占九六之爻。傳之諸筮。皆是占變爻。連
山歸藏占七八之爻。二易並上。不知實然。以否穆姜司空季子。
竝於遇八之下。別言周易。知此遇八非周易也。と有依。尔て其
大凡を知る。し。はと玉海。春秋正義。崔靈恩以爲筮必以三
代之法。故太卜掌三兆三易儀。祀特牲。少牢。筮

皆旅占卜徒父筮之。其卦遇蠱。不引易文。注云。卜人而用筮。不
能通三易之占。據所見雜占言之。刘炫云。成十六年。筮卦遇復。
亦是雜占。則筮法亦有雜占。不必皆取易辭。と云ひ。はと程廻
曰。古之筮者。兼用三易之法。衛元之筮。遇屯。曰。利建侯。是周易
或以不變者。占季支之筮。遇大有之乾。曰。同復于父。敬如君所。
此固三易辭也。既之乾。則用變矣。是連山歸藏或以變者。占ふ
とも見えたり。○上件三易此事。了就了。明は楊慎が升菴外
集。尔周禮太卜掌三易之法。于令升注云。天地定位。山澤通氣。
一章此小成之易也。帝出乎震。齊乎巽。一章此連山之易也。初
乾初夷。初艮初兌。初萃初離。初釐初巽。此歸藏之易也。はと或
易。今亡。惟存六十四卦名。而又闕其四。與周易不同。需作溥。小
畜作毒。畜大畜作毒。畜艮作狠。震作釐。升作稱。剝作僕。損作員。
咸作誠。坎作榮。謙作兼。遯作遂。蠱作蜀。解作蕪。无妄作毋。凶家
人作散。家人。渙作與人。又有瞿欽。規夜分五卦。岑霽。林禍。馬徒
三復。名卦不知。當周易。小成者伏羲之易也。而文王因之。連山
何卦也。とも見えたり。

者列山氏之書也。而夏人因之歸藏者歸藏氏之書也。而商人
因之夏得人統。故歲首建寅。而卦首艮。商得地統。故歲首建丑。
而卦首坤。周得天統。故歲首建子。而卦首乾。伏羲之易。小成爲
先天神農之易。中成爲中天黃帝之易。大成爲後天。予按邵子
之易。先天後天。其源出於此。今之讀易者。知有先天後天。而不
知有中天。可乎。予云。予也。但此爲後天。と云。までハ。于令
楊慎。自說ある由。於る。予令升と云。西晋の世。予寶字
令升。と云。ひし人あり。然。依。此。説。は。于。寶。非。交。宋。此。羅。泌
路史。餘論。論。三易。とて。出。せ。る。説。此。省。略。み。て。予。案。と。云。
る。語。を。や。が。て。路。史。に。陳。卧。子。曰。と。て。載。せ。る。説。の。一。字。を。違
て。出。せ。る。あり。楊。慎。が。杜。撰。盜。説。を。今。ふ。始。め。ぬ。事。あ。ら。う。
此。を。甚。し。と。云。べ。し。次。に。予。案。の。易。小。帖。に。于。寶。註。と。云。る。ハ。此
楊。慎。が。説。を。欺。り。ま。て。案。を。予。に。は。て。近。世。清。の。毛。奇。齡。が。易。小
寶。の。説。と。思。予。る。れ。ら。む。う。し。は。て。近。世。清。の。毛。奇。齡。が。易。小

帖と云ふ物。予寶註三易謂連山首艮歸藏首坤周易首乾
而又云天地定位。山澤通氣云云。此小成之易也。帝出乎震。齊
乎巽云云。此連山之易也。初乾初夷。初艮初兌。初榮初離。初釐
初巽。此歸藏之易也。則連山終艮歸藏次坤與首艮首坤之説。
自相抵牾。且以大傳帝出乎震一節爲歸藏之易。亦不合。且亦
不知所據。山也。と云。ふ。を。彼。章。に。艮。字。終。に。出。せ。ま。せ。む。合。さ。連
歸藏首坤。と云。お。く。初。乾。初。坤。と。坤。此。次。に。在。る。を。何。ぞ。と。難
於。た。る。説。を。案。に。此。言。此。如。し。○。あ。る。別。條。に。歸。藏。易。卦。名。
有。異。字。以。坤。爲。夷。以。坎。爲。榮。以。震。爲。釐。而。他。皆。如。字。家。舊。有。歸
藏。鏡。八。字。皆。異。相。傳。歸。藏。易。本。如。是。要。是。後。人。偽。爲。之。者。今。已
無。是。物。矣。但。八。異。字。下。仍。有。八。正。字。按。字。書。有。釐。榮。字。無。夷。字。
と。も。云。り。玉。篇。與。苦。魂。切。古。文。坤。焦。氏。筆。乘。與。即。坤。字。と。あ。り。
若又云伏羲之易。小成爲先天神農之易。中成爲中天黃帝之

易大成爲後天此卽宋儒以伏羲爲先天以文王爲後天以八卦爲小成以六十四卦爲大成之所始夫大傳祇有八卦而小成一語此又增中成大成原是不安且其云小成者就揲著者言之謂十八變中九變而成內卦祇爲小成必十八變而後引伸觸類能事已畢非謂伏羲祇畫八卦至神農而後重之八卦因重皆伏羲事與神農無與大傳自明其以小成屬義易固已可怪ハ、揲入文ふして唯ハ變ふ事を知ざる耳を非あり其由を本編及び次卷此末條よ論若宋人造爲因重之法會易層累加畫指爲先天而以先天屬伏羲乃取說卦中義易卦位指爲後天反以爲此文王易非義易則悖誕極矣小成大成

先天後天太易太會少易少會皆前人已言而更易其說遂致懸絕始知偶然之言後將憑倚不可不慎と云云宋人以別條易爲先天文王易爲後天始于陳搏此竊于竇伏羲先天神農中天黃帝後天之說而改襲之然不及中天也先天後天見文言若中天則揚雄太玄列九天之名一曰中天非中古之謂後有造爲陳氏中天圖者已可笑矣とも云予已よと連

山歸藏二易久已按北史劉弘奏購求天下遺書其時劉炫頗有名遂造偽連山易魯史記等百餘卷上之已取賞去而後有訟之者免死除名鄭樵謂連山易至唐始出皆偽書也崇文總目載歸藏易晉太尉參軍薛貞註在隋世尚存十三卷後祇存初經齊母本著二篇至唐世又有司馬膺注十三卷至宋亦亡晁以道謂商易爲張天覺偽作或云卽司馬膺作故吳澄謂連

山歸藏劉光伯司馬膺偽書也。

此等の事ハ既ニ前條ニ註セリ。若

衛元嵩作元包亦以先天後天太少會易立卦一如于寶所言。

此則倚傍不足道者。

元包此事ハ玉海ハ唐藝文志衛元嵩元包十卷後周人唐蘇源明傳李江註李江

序文質更變篇題各異夏曰連山殷曰歸藏周曰周易而唐謂

之元包其実一也包者藏也言善惡是非吉凶得失皆藏其書

也晁氏志坤為首因八卦世變為六十四卦之次又著運著說

原二篇統言卦體不列爻位自云周易元包一也元包以坤為

首乾後之義祖歸藏宋乾道中張行成以蘇李徒言第桓譚新

其理疎達其數著元包數總義二卷と見えり。

論云連山八萬言歸藏四千三百言連山藏于蘭臺歸藏藏于

太卜則必漢時尚見其書故字數鑿々如此惜不可考矣と云

依之皆理れるる說等ハ也。おろ委く本書ちて次條とめ

以下ハ周易のみふ關う依事等ハ論ハ也。

六

帝出乎震齊乎巽相見乎離致役乎坤說言乎兌戰乎乾勞

乎坎成言乎艮。

萬物出乎震々東方也齊乎巽々東南也齊也者言萬物之繫齊也離也者明也萬物皆

相見南方之卦也聖人南面而聽天下嚮明而治蓋取諸此

也坤也者地也萬物皆致養焉故曰致役乎坤兌正秋也萬

物之所說也故曰說言乎兌戰乎乾々西北之卦也言會易

相薄也坎者水也正北方之卦也勞卦也萬物之所歸也故

曰勞乎坎艮東北之卦也萬物之所成終而所成始也故曰成言乎艮

此第六條之說卦傳不採也載せ也。

但し萬物出乎震と云ふより以下ニ注文あり

る古來より誤りて本文と連書し來る也。今は其意を得てかく分注し記せり。是謂也る帝は天

日字云ふ其の毛詩大雅不皇矣上帝臨下有赫監觀四方

有協上帝は正尔日を指して云依尔易緯尚書緯ハ也。孔

子曰帝者天稱也。有尔字思合せて辨ふ也。の註疏ハ

據其在之上之躰謂之天因其生育之功謂之帝也と云るも然
 る言あり然るを彼邵雍朱熹らを始帝者天之主宰おど
 此と云ふ委から又舊く古の帝出於震とあるも太皞
 氏の東方より出ると義を取成る説有まど其も違へり
 本帝とはもと天日此號れるを王者は天地を合する徳
 る人転用せる謂はと凡て帝と稱し王と稱する杯の委
 しき事を太古傳ふ記せるを見るべし
 ちて天日此東方卯より出て晝夜一周
 するを寓意して八卦の方位を示せる文あり然まど此を
 古説よ非は彼姬昌が新案せる方位説を其子姬旦う否然
 う記し遺せるを説卦傳を集めし時ふ撫む載とる者あり
 説卦傳を易此古説を集めし一部の書れるを十翼中より序
 收とる物ふて孔子の自作ふ非は其由を第九條を委く
 論ふ然らば眞れ古方位は何れと言むる本書よ此條を
 俟るに然らば眞れ古方位は何れと言むる本書よ此條を
 前ふ天地定位山澤通氣雷風相薄水火相射八卦相錯云

云と云ふ條あり諸本水火不相射と有まど不を衍れり
 此む四言四句を押韻せむ文あり或や本
 編ふ委く論ふを此は太皞伏羲氏此傳へし八卦方位は眞
 見て知るべし
 説ふて此を圖象を摸せむ斯乃如れざるを文義を徴し字
 義を徴し天地間の實理
 を徴して其義理乃著明
 なる由を既る本編ふ委
 曲ふ記せまば今更よ云
 はは抑おれ天地定位の
 章をも太皞氏此古説は

太古眞方位圖



適る存まざる金科玉條の文あるを周漢の世とめこれ姬昌

の擬方位を欺りて。今其眞方位を察し得る人無_レ也。朱熹が本義及び啓蒙に。天地定位。章に旨ふ。符合する由_レを伏義八卦方位圖を云ふを出して。先天圖とも稱せは

先天擬方位圖



其狀かくは如くして。其説ふ。邵子曰。乾南。坤北。離東。坎西。震東北。兌東南。巽西南。艮西北。自震至乾爲順。自巽至坤爲逆。と云ふ。此圖もと。華山は道士陳搏と_レ出

ある。邵雍まで傳來せる由_レを所謂先天之學也と言ふ。邵子と宋は邵雍を云ふ。其傳來の次第を本義に陳搏李之才。穆脩。邵雍ありと云ふ。此輩は傳ハ共よ宋史に見

えて。易学者流ある。中_レ陳搏を字を希_レ。今此圖を見は。夷と云ひて。道家此学の名高き人あり。

艮山兌澤のみ。其正位を得とまど。其餘の六卦を相對せる。狀を。天地定位は本文に合_レず。其卦位をみは甚く違_レず。

是は已_レが考_レず。前_レを出せる。按_レふ。此を後人は。天地定

位云_レは古説を尊信_レす。心_レを有_レら。天地間の實理を

聞_レく。乾天は東方ある古義を識_レざる。偽作して世を欺_レけ

ふ。然_レまど其を謂_レゆる。後天之学。姬昌が卦位を。疑_レひ有_レし。故_レある事_レを云_レはくも更_レあり。して其

作_レする趣_レを。乾天は君は象_レあるを。帝出乎震と云ふ條に。聖

人南面而聽_レ天下嚮_レ明而治_レと云ふ語を。思_レを合せて南方を

配_レし。右_レを竝_レぶる。左_レを取_レり。左_レを竝_レぶべき巽坎

艮字右に取まる故ふ。かく偽れる卦位の出来し。其拙ま
 心ふ。眞此方位を悟り得たと思ふ物から。然にぐお我の案
 と爲てた。人の信はじき事を恐まて。伏羲氏の遺圖に託し
 て。密に人字擇びて傳授せし物あり。此図もと陳搏より出
 ば其作者うれら。陳搏あり。又若くハ陳搏より出しと云
 ふ。託言よて。此を傳授し來まりと云ふ徒の中。作者有
 らむも知。ちて近頃世ふめて雜書。五要奇書と云ふ物の中
 へ收る。郭氏元經と言ふ物。義皇卦篇をい多條あり。其
 條中。謂もは方位を考る。今出せる先天圖此方位と
 同じた。彼元經と云ふもの。此先天圖此偽造ありし以來
 此偽託れる。是圖を彼元經に依りて作れる。其本末は

後天擬方位圖



詳あら。彼元經と云ふも。此晋に郭璞が著せる。其門人趙
 載せいふ者に注せる由れまど。注本文共ふ。同人
 此作と見ゆる。上ふ穴ぐ。過る五行説ふて。郭璞が餘
 の著述を。似もたぬ。拙ま物あり。然ま中。少の取べ
 き事。無き。非。其。儲。は。朱熹。此。本。義。及。び。啓。蒙。ふ。文
 別。論。は。む。と。欲。る。れ。り。

王八卦方位圖を云ふ。字出して。後天圖とも稱せる。其状

かく此如くありて。此は本文を
 擧ぐる。帝出乎震云云。と云は
 條に註よて。字出して。其説ふ
 邵子曰。易者一會一易之謂也。
 震兌始交者也。故當朝夕之位。

坎離交之極者也。故當子午之位。巽艮不交。而會易猶雜也。故

當用中之偏。乾坤純易純會也。故當不用之位也。此文王八卦。乃入用之位。後天之學也。と言ふ也。此二書れる説を合せて抄せり。委くを本書を見る。抑右は帝出乎震云云は本文也。朱熹も此文王改易伏羲之卦圖也。云々如く。心巧み思ふ旨有て。太畧氏は古方位を改易せる。杜撰は方位れるが故也。都多天地の實理造化の妙用を叶た。然るに此卦位は中なる眞は方位を得るを。離火は南方にあると。坎水の北方にある耳あるが。其餘は六卦を皆違ふ也。八卦の中も。只此坎離の位はを催し。北風來て。冷氣を催す趣をもて。何なる愚人も。其知り得べき氣行ふる故也。元は休て措とゆるべし。其はまは乾天君父の卦也。西北維を配し。坤地臣母は卦也。南

西維を配せる也。天尊地卑。會易上下は方位亂れし上なる。艮山を東北維を配し。兌澤を西を配せまば。山澤は氣通行せ。震雷を東を配し。巽風を東南維を配せれ。雷風の氣激迫せば。互に生化は功を爲す能は。此は如交。豈易は實理と云むや。ちて此杜撰安作は中なるも。乾を西北は艮字め。第一の曲事れるが。其餘は然し。も深く巧める卦位は。非交。天地は実理合ふや。合交や。省みもせて。慢に配當せしと見え。とり。乾艮の方位は。姦曲し。抑姫昌が右は方位はも。ある由を。第八條に云ふを見べし。渠が當時と。既る三千年近く。其間なる。孔子を始め。聖賢は名字得し。倫も多く出た。此は實理を合と悟れる者れ。古今は儒者ら。會易家れ。悉そは杜撰を欺のま

て其著せる書等ふ。天地の道理を説くを言へ。此卦位
説ふ依づれば書はふき故ふ。世に其毒を流せよと。實に甚
大支れり。然るに今行はるる方位家此説く事をも皆此卦
の事を為しめ西南震は向ひて西南震
向ひて東南兌の事を為しめ西南震
多為しめ東北巽の事を為しめ西南震
向ひて東乾此事を為しむる故ふ。却て其方神此崇正を
受て災禍逢ふ者いと多の。周易有りし以來古今の間
此禍を受とる人幾億万人を知らば此毒を流せる者姫
昌は非交して誰ぞ其を世俗に庸人良も此方位を天地自
然の實義此如く心得て乾をイ又干巽をタツ三と訓む類
ひを其本訓の如く思ふまで人心深著とま。今何論
ふとも容易止むべき非交然も古道志有らむ人
を此卦位説は世毒を為こせ。然るに邵雍朱熹れど彼
浅く知らぬ謂を思ふべきなり。謂もる先天之卦位。此謂もる後天之卦位とも取て。

竝ふ甚深微妙の神理ある趣ふ説作せるは是ま何ちふ
愚昧ども。先天後天と云ふ説は由來に前條に引ある。朱熹
の説ふ先天者伏羲所畫之易也。後天者文王所演之易也。伏
羲之易初無文字。只有一圖。以寓其象數。而天地万物之理會
易始終之變具焉。文王之易即今之周易。而孔子所為作傳者
是也。伏羲在前。文王在後。必欲知聖人作易之本。則當考伏羲
之書。若只欲知今易書文義。則但求文王之經。孔子之傳足矣。
兩者初不相妨。而亦不可以相雜也。と云ふ。此をあくみ用
引切めて抄せり。此餘も邵朱らぐ兩者相妨げに微妙此
道理ある趣を演布せる愚説ども。諸書は多く所見とまど
煩げま。然れども先天此卦位は是と爲と死を。後天の卦
今を云は。

位字非と爲びて有べのらば。後天は卦位を是と爲せ。先天は卦位字非と爲せは有べ。兩者初不相妨と云ふ道理を。絶て無支物字や。此を文王孔子まよと作る也。予が此説を易ふること能はじを。況て邵雍朱熹らぐ倫字や。何ぞ容易げに破斥する。鈍儒輩の見て。決然て憎み怒る。が多かるべし。若し此人有らむ。予が右の説ども。論じ直して問を試み。予をあむ其問を俟た者。れりかし。抑八卦は奉信をば。尊重すべき物。れる事を。そは卦々各々。其々は眞象を包藏し。まよ各々。其々。終古も動らざる。方隅の位所。自然に定はりて。三才は實理。籠罩せざる事。然く。幽明は玄理。冥合せざる事。れき故。あは。然れ。此方位

を。凡人の知力を以て。替るのら。然定位あるまよ。山は走る。獸を海に養れ。海は游ぐ魚を。山は畜ま。ぎ。協を同じ道理。あは。然るを謂ゆる。先天後天の卦とも。よ。姫昌は。ほ。ま。邵雍。よ。ま。れ。其才覚を以て。杜撰よ。立たる方位ある。幾。何。あ。鳴呼る所。そは。今。世。あ。家相方位家。を。稱。する。徒。は。言。ふ。井。を。掘。り。藏。を。建。ぬ。に。辰。巳。は。間。と。戌。亥。の。間。と。を。言。と。し。丑。寅。は。間。と。未。申。の。間。と。戌。凶。を。受。る。由。云。ふ。を。其。説。く。趣。を。謂。也。後天學は辰巳。戌亥。乾。丑寅。艮。未申。坤。を。配。せ。る。方位。は。空理を証會せ。協説等。なる。往々。そ。は。吉凶。は。應。驗。あ。は。但し。此。事。の。み。あ。ら。ば。謂。ゆる。家相方位。字。説。く。徒。の。言。ふ。も。實。よ。吉凶。は。應。驗。ありて。捨。る。ら。然。説。も。有。る。也。然。る。べ。き。謂。ゆる。事。れ。る。が。其。説。長。々。ま。は。此。を。著。す。と。能。を。別。よ。委。く。論。ふ。を。待。べ。し。此。を。そ。は。後

天方位は、案ふ其所を得多ゆ故は非也。其説もそ。文王が
 凡意を以て立るる卦位は、証會説あま。然る應驗は實ある
 也。太界の神意を以て。觀じ定免し方象は。無窮ふ易らに。西
 北ふ見山。東南ふ兌澤。交ふ通氣あるが故ふ。井藏及び諸事
 尔吉く。西南ふ震雷。東北ふ巽風。互ふ激薄生るが故ふ。井藏
 及び諸事ふ凶き也。此道理をあや密ふ云むも。案ふ
 ち。辰巳ふ井藏を造らば。巽風撓散の所あるが上。相対す
 依乾天は威お厭れて凶あるべく。戌亥ふ井藏を造らば。乾
 天は位所を犯して土を積み土を掘るが上。相対す依巽
 風の氣ふ散さきて凶依るを此二隅ふ井藏を造りて
 吉あるは。戌亥の隅を元と見山は位所ふて。万物を生じ
 う。扱水原れるが上。辰巳の兌澤たり。悅潤の氣通る故
 尔吉く。辰巳の隅を元より兌澤は位所ふて。悅潤の氣通る故
 が上。戌亥の良山を元と生成は氣通る故。吉あり。斯く依

丑寅まよ未申ふ。井藏を造りて凶あるを。丑寅の隅を。巽風
 の位所よ。元と撓散する卦徳れるが上。相対す未
 申は。震雷たり。激迫して凶く。未申の隅は。震雷は位所よ。未
 元と撓散して凶也。もし後天学は。卦位を以て云。と。丑寅
 を。良山あるが上。相対す未申と。坤地は助。而も。必
 吉あるべく。未申を。坤地は。助。而も。必
 山の祐。而も。必。吉あるべき。凶れるは何ぞや。凡人の立
 たる卦位れる故。実理は。合さる。斯の如し。固執や
 せ。先入の病を忘。熟々此謂。思ふ。必。誠や
 八卦は。眞方位は。も。幽冥は。事宰る。大物主神。即稱ゆる
 太界氏は。其徳天地に通じて。變通方ある。萬事は。終始を窮
 めて。庶品の自然。協む。其。明日月。小竝る。神眞とる。天
 祖は。錫予。依。河洛は。眞數。本。扱。仰。まて。象を。天。小。觀。じ。俯
 して。法を。地。小。察。し。身。と。物。小。取。り。定。免。給。予。る。事。也

故也。其理終古不動。宇宙は開かぬ彌綸せざるが
故也。右に如く應驗あり。何ぞ忌々しき神慮あらばや。然此
宇宙を億兆の區別なきとも。其理よと億兆より別れて。各々
相離れ。一國一郡一村一戸ごとく。其理を具ふる。何
と譬ふ。方解石と云ふ石の。其質素より方形れる。何
砕けども。皆方形なる。砕けいり。細末なきとも。謂ゆる。頭微
鏡を以て。是を見る。其細粉を。細末なきとも。謂ゆる。頭微
塵。如く。具はる。何ぞ奇しからばや。或人難じて言
く。後天に卦位を。天地に實理を合ざれば。杜撰ありと言ふ
也。謂ゆる。聖言を侮ふ。非也や。答ふ。吾豈真に聖人を侮ら
むや。彼姫昌を真聖と非は。擬聖なり。抑聖とを。孔子に語る
も。所謂聖人者。徳合於天地。變通無方。窮萬事之終始。協庶品
之自然。敷其大道。而遂成情性。明竝日月。化行若神。下民不知

其徳。親者不識其鄰。此謂聖人也。と言ふ也。あむ此類れる。聖
の古説ども多し
れど。所狭けれ。今を目。史記の周本紀。戎始。姫昌が事蹟
易き一説を引出あり。を取竝る。此聖に古説を律し。察し。ける聖徳いばあるか
有は。此を其傳記を引出は。までも無之。今論する方位をも
て言むるも。天地造化に變通を識らば。其説庶品の自然に
協は。万物の情性に通ぜ。然る人の争で萬事に終始を
窮めむ。然る字。豈明日月に竝ぶと云むや。豈徳天地に合は
と云むや。予是を以て真聖と非は。擬聖ありとは言ふなり。
抱朴子行品。措細善。以取信。陰挾毒。而無親者。姦人也。雖言
巧。而行違實。履濁。而假清者。佞人也。也。何り。姫昌能く此を合
へ。正。そは虞芮の訟を止。免。枯骨を藏。紂王が炮烙の刑を
諫め。する類也。細善を措て。信を取れるあり。其言を巧あり

しうど其行ひを実ふ違ひ濁を履て清を假也。陰も毒を挾みて親なく其子姫癸遺言して其君紂王を凶しと何の太界氏傳三層由來記西籍慨論等論ふを見べし然る俗に漢學者ども孔子の姫昌を聖と稱せる言も有は字以て頓ふ聖人ぞを畏惑むて其言行に當否をも糺さざ信じ。總て周秦に頃とめ聖人と稱し來まる徒に言行を是聖語あり是聖行ありと云ふ也。田鼠の猫聲を聞ある如く。屈敬拜伏する也。何ちふ愚昧ぞや。凡そ古今に漢學者流の其學不拙劣未練あるを熟々ふ思ふ也。かの聖言聖行と云ふ聖の名も威さまで其言行の當否を糺し稽ふは依あとい也。殊に孔子の姫昌を聖と稱せるハ時世に媚と

ぐる表文其時王を聖とも神とも稱するも同じ。その孔子の上の擧げたる説の如く聖の本説を知らる人あり然る時世の媚とる言はざる文王をいふ眞の聖人と思ふ也。聖人と思ふるも有ま其言を頼みて一向に畏ぢ尊まむ也。我が心を他奪ハるゝもて其は愚昧此心ありかし。予を然る世俗の學者らに如く聖に眞擬をも糺さざ其言行の當否をも諦めば雷同して信ぜることとは得爲せぬ也。然るに聖言を侮るとも何とも云ふかし。凡て漢籍に聖人擬聖とあるその委き説を諸書に参考して赤縣太古傳に聖人此品定せる所論へるを見るべし。

七

大衍之數五十其用四十有九分而爲二以象兩掛一以象三揲之以四以象四時歸奇於扚以象閏五歲再閏故再扚而後掛是故四營而成易十有八變而成卦八卦而小成引

而伸之觸類而長之天下之能事畢矣。

此第七條を繫辭傳ふ出で。立卦筮儀は古説れらるぐ。其揲策
は趣を。孔穎達が正義ふ。每一爻有三變。謂初一揲不五則九。
第二揲不四則八。第三揲亦不四則八。若三者俱多爲老會。俱
少爲老易。兩少一多爲少會。兩多一少爲少易。三變既畢乃定。
一爻。朱熹が本義ふ。三變成爻。十八變則成六爻也。九變而成
三畫。得内卦已成六爻。而視爻之變與不變。以爲動靜。則一卦
可變而爲六十四卦。以定吉凶。凡四千九十六卦也。鄭玄王
弼と已以來は諸註ふ悉く載して。十有八變の筮法を稱し。
人皆竊く信用せれと。傍る・點字施せる六字を。姫昌が攬

入ふて。其用四十有九を有はも。殷易は四十五策ありしを。
彼が杜撰ふ増ふる數れらる事れと。本編ふ委く論するが如
し。○はて本書よ。此文と下文をば間ふ。乾之策云云と章字
起して。當萬物之數也。云まで。四十五字は文有まじ。其を
姫昌が十八變筮は。策數を通計せふて。論ふもも足らば
章ありま。一向捨てあるし出さば。此を既ふ十八變筮を
よ足らばと捨ふる人。信ある徒さるふ取る
の有しごとを所思とめ。○或人問ふ。四十有九策。十有八變の
筮法を。古來とめは法ふて。人ふとめ聊の異儀ある有れ。總
て偽法ありと。捨ふる人あると無し。然ふを前ふ此を。絶
多筮し得はじき筮法ありと云ふを。何等は説有て言ふ

事ぞ。答ふ其謂也。古法也。眞の古法也。非也。姬昌が新法也。
依也。四十九策を用ふる也。更ふ論心無支事也。既も
引ある。通志玉海あどふ載せる古説也。歸藏用
四十五策周易用四十九策と有る。よて知べし。斯て其古説
中ふ。以象三也。の字を攬入し。再劫而後卦と云ふ也。重卦
法を示せる語也。左右兩策を揲すし。奇也。指間也。狭め
依後也。挂依義也。翻案して掛ふ作也。一爻三變也。い也。勞煩
し。此擬筮法を作也。且下文也。十有八變而成卦也。ふ偽文字
さす。攬入せり。此偽筮法の揲著也。儀也。漢儒以來の
注釈ども。普しく出で。互ふ。少く。此異同
を。何まど。皆人の。知ま。然るも。其筮法は。も。四十九策を以
て。其法は。如く。行ふ。過不及。其數出來て。眞筮也。得べし。と。此

物也。其也。此筮法。從事せ。人あ。のら。眞勢達富と云ふ
人。説ふ。夫著を揲すて。得る所。此策。四字奇とし。八字偶と
し。然るも。四十九策。ふ。は。初變也。左手。此策を揲すて。一を
得ま。必。右。此策を。二。得て。掛一の策。三合し。五
策。此奇數と成る。此奇數を得る。此一あり。○今云。挂一。此
依也。右手。此策。小指。間。狭
める。云。下。こ。ま。よ。効。ふ。べし。或。二。得ま。必。右
此策。を。二。得て。掛一。此策。と。三合して。五策。此奇と成る。
此奇數を得る。或。二。得ま。必。右。此策。を。一。得て
る。の。二。あり。或。三。得ま。必。右。此策。を。一。得て
掛一。此策。と。三合して。五策。此奇數と成る。此奇數を得る。此
て。四を得れ。必。右。此策。を。四。得て。掛一。此策。と。三合

して始めて九策は偶數と成る。○今云上は四を奇とし、

五策を奇と云ひ九策を偶と云ふことと云云。朱熹が説く、此を
を用ひて其奇偶を断る説等、此中にも、朱熹の説は、一變
所餘之策、左一則右必三、左二則右必二、左三則右必一、左四
則右必四、通掛一之策、不五則九、五以一其四、而為奇、九以兩
其四、而為偶、奇者三、偶者一也。是奇數と成ゆも、此三、偶數を
と有は、當正て云ふ説あり。

成ふゆ一。此を奇偶三増倍は扁倚形。豈あるを公正に

立法と云むやと言はるる。知らし。倚るが故に試みは著

を執正て四象の過不及を驗する。奇數の出ること甚多
く、偶數の出ること少。十中の三は在りて、三奇は老易二奇一
偶は少會なれ、二十反出の中は二偶一奇の少易は出る
こと、十反は過び、三偶は老會出ること、僅は一、二反は、是
を以て乾卦の出ること常多、坤卦の出ること甚希あり。是
り。然るに其所屬の卦々は出るも、過不及は、此を推して
知るべし。古今は易學者流、この議なきハ論ふも足らぬ。四
十九策と定めし、姬昌を更ぬり、此を傳する、孔丘氏も此

何ちふ事ぞも。然る此人、四十九策は非を辨する説

は宜れまご。又別は九を八は誤字なりと言ふ説を立て、其

言ふ、四十八策の用數ふては、初變ふ。左策を揲して一を得

まむ。必は右は策とゆ二を得て、掛一の策と三合し多。四策

は奇數と成ゆ。こま奇數を得るの一あり。或は二を得まむ。必は右は純策

とゆ一字得て、掛一は策と三合して、四策の奇數と成る。こま

奇數を得る。或は三を得まむ。必は右は策とゆ四を得て、掛

一の策と三合して、八策は偶數を成ふ。こま偶數を得るの一あり。或は

四を得まむ。右の策と正三を得て、掛一は策と三合し多。八

策は偶數とある。こま偶數を得るの一あり。是奇數を成るもの二偶數

を成るもの二おまむ。奇異等分ふして。十有八變中ふ隻半
は冗策れく。毫髪は支吾おく。眞よ至正は筮法れゆと云也。
お前説と共み。其門人松井暉星と云ふ人の著せる象變辭占と云ふ物ふ見えとゆ。此を古今は易
學者流は説等は中ふを卓越ふは説れまど。仍十有八變の
先入。その固疾を成して。彼四字は攬入を更ふ也。掛字を卦
字は偽字ある事をも辨ずべ。別ふかく臆説を工夫して。本
は煩勞れは筮法ふ從扱く。無證よおは新説をれも立るゆ
ける。其を此本書も。四十八策の本據を云ふ説も。古傳云と
て。夏ふは三十八策を用ひ。殷ふは四十八策を用ふを
四十八策を勿論れり。三十六策もても筮にべし。獨四十九
策もては断然として筮をべらばと言ずり。然れど四十
八策の事ハ古書ふ絶て證文有こをふし。然れば此を上ふ
引る通志及び玉海おどふ。四十五策と有る由を途おは

きて聞誤れる。或を杜撰りは二扱多出は。然れどこそ古
傳云とて。書名をバ擧ざりけき。其道ふ取ては。無上は重
た事ある。然る臆断。儲志の新説を立扱くも。其筮法の勞
をしも為べき事うを。煩おく。か扱迂遠ふして。急卒は事ふ施用し難事事をば自
知せゆが故も。十八變は筮を立は長た間ふを。自然ふ神氣
一致せど。惑亂妄想の發する事おまむ。其代ては用ふる由
ふて。圓子とて。表裡ふ初二三四五上は字を刻み。朱と藍を
裁刺とゆふ十八箇作也。それを擲て。本卦及び之卦を索むは
擧げしも。吾も用む。門人らふも傳ずてぞ有は。此を必加
は擲錢よと靈棋形どは法をゆや思ひ著けむ。其圓子と云
の傳を受とるを。密ふ見とる事あり。然して彼擲錢法は類
をむ。甚く斥けて。大切至極の天命を請む。鬼神を驚かし奉

る事。兒戲玩具等しき所為。不敬侮慢の至あり。不敬無礼。ある時。鬼神感格せざれば。其卦應せざれば。何の用を為さむ。聖人は。是が為。おこそ。著筮法を立給。予。其。佗種々の設卦法あり。と言。予。ども。都て取る。予。足。交。と。門人。そ。れ。遺。説。を。記。せ。る。ハ。何。れ。事。も。予。を。以。て。是。を。視。ま。だ。圓。子。を。更。あり。十。有。八。變。の。筮。法。も。兒。戲。に。等。く。こ。そ。思。え。る。れ。然。ま。ど。此。達。富。及。び。其。門。人。暉。星。を。か。り。易。眼。を。具。し。稽。疑。判。断。の。法。を。も。辨。予。知。と。る。人。ハ。ま。と。無。く。れ。む。は。是。不。就。て。按。ふ。近。く。寶。曆。の。世。頃。平。澤。常。矩。と。云。依。人。何。ゆ。此。人。れ。言。ふ。繫。辭。傳。れ。る。十。八。變。は。筮。法。を。孔。子。は。言。を。爲。ま。ぞ。看。來。は。ふ。變。營。數。次。ふ。し。て。俄。頃。辨。じ。難。く。急。卒。に。際。いと。便。利。あ。ら。ぬ。且。註。語。錯。亂。と。す。聖。人。の。全。文。を。非。交。疑。は。し。き。者。れ。ゆ。次。に。擲。錢。法。心。易。法。ま。と。取。捨。取。り。く。を。有。る。ら。ら。び。今。や。年。來。こ。ま。を。試。こ。て。其。一。定。據。は。る。足。ざ。る。事。を。悟。る。

故。古。法。を。斟酌。して。自己。に。發明。を。加。予。別。一。家。の。法。を。立。於。惟。易。は。活。法。を。契。む。應。驗。の。過。お。き。る。頼。ふ。世。に。易。學。者。或。は。予。を。扣。死。て。蜂。起。せ。や。も。是。を。答。ふ。る。よ。詞。を。以。て。せ。次。直。尔。著。を。立。て。其。應。驗。を。示。さ。む。と。言。予。也。此。を。其。著。せ。る。ト。見。え。こ。り。十。有。八。變。の。筮。法。を。看。破。せ。る。見。識。の。高。き。お。と。古。今。不。類。れ。く。是。ま。と。易。學。者。流。中。に。一。偉。人。よ。ぞ。有。り。と。は。斯。て。其。筮。法。を。五。十。著。を。執。り。其。一。策。を。取。り。格。に。中。刻。を。置。く。虚。一。小。象。と。也。四。十。九。策。を。手。に。信。せ。る。中。分。し。て。二。を。爲。し。右。に。一。分。を。格。に。右。の。大。刻。を。置。き。其。中。に。一。策。を。取。り。て。左。の。小。指。間。を。掛。け。左。手。に。一。分。を。右。手。を。以。て。四。々。四。々。を。撰。牙。八。除。し。て。其。奇。策。一。を。乾。を。し。二。を。兌。と。し。餘。を。之。効。

むて。是を上卦とし。再總數字合せて。前式に如く。其奇策を見下卦せし。其變爻を取ふ。復綜合して。三々三々を撰ず。六除して奇策に數を以て。初より上爻まで六位に當て。一爻變を作まじ。是世に謂ふは畧筮法也。此其著筮蒙節と云。ものみ出せり。然して其ト筮經驗も。初二三此みを変べと返り論ず。松井暉星が此筮法を破する説。是變爻法にては。一生涯に幾千萬筮を為すと雖ども。一卦として不變の卦に遇ふこと無く。加て固より易道を變化を尚む事ある故。二爻變も有り。又三爻四爻五爻もあり。六爻皆變は卦も有り。是易に變易爻易の所以あり。然るに此畧筮にて。卦ごとく必一爻變に局れる法。此法を以て不變の卦と。二爻以上は變と云ふ者ハ。絶て有ることあり。按ふに此を彼邦にて。感動象數易法の取扱ひ。一爻變の法ありけるを。論ず。擲錢法も轉じ。其を我邦に傳ふし。著筮も移し轉じて。彼八除の法を為るに。然るに上卦と下卦を起せり。是感動易に遺法あるに。

此に尋でまよ一人有て。其法を據りて。下卦より先。卦を設くる法。為とるが。即今に俗筮式あり。と言ふに。實に然る事の論。抑是徒の然。然法どもと。凡て觀易の眼高からず。姫昌が偽文を欺かまて。其を批正參考する事を知らず。強ひて努めて荷む出せる愚法等。太界神聖に古面目を都る契は。惣事れまば。一切を掃除して。行む用ふ事ある。○再問ふ。十八變の筮法實に偽法ならば。古くも史蘇君平が如き。筮聖に出入るも非ず。然るに渠等が如く。萬變に應接せる易者の出るは如何ぞや。予乃答むと欲する。傍ふ生田篤道有り。顧て汝に答せると言ふは。篤道云く。師を右に如く。筮法に古式を論はま在る。はと恒る。

我等ふ誨予給予る説有まぜ。筮儀を然しも泥むはじ死謂
何也。然るは三千年ふ近く。眞式は泯没せる故ふ。謂ゆる十
有八變は偽筮及び擲錢を始め。諸般は筮儀起れはら。其字
用ふる倫各々その占判は奇中正應して。史蘇辛廖と相竝
ぶる徒も。和漢古今ふ少のら然る。必しも筮儀の眞偽ふ
依りて。占判ふ淑慝あるふ非也。幽ふ神明は祐助を賜はる
ぐ故ふ。偶ふ正應あるあり。然も有らば前件々のごと。師の考記せられし擧むいふを言
ふふ。彼告朔の餽羊ふも類也。べき其眞式は亦の見ゆるを。
古神易を論ひ顯ははと爲て。筮儀を然しも泥むべきふ
非也。とて黙止あるべ。其由いふると言ふふ。誰よまま。此道
きふ非ばまむあ也。其由いふると言ふふ。誰よまま。此道
り心字潭め。力字竭して熟く習慣せる人。此道字始給

予は。太皞氏一號扶桑太帝。まよ竝ふ立て事成し給予る。泰
一小子一號東華大神。及び天地雷風水火山澤は八神。まよ
天神地祇列仙諸靈の降臨照鑒はし坐ば。誠意ある道よ
當らば。占判ふ正應有むまよ何の疑はむ。今擧ぐる諸神の名及びその功德
あど此事を。師の著書ははとふ。抑は至聖は人。腹中既
説辨予らましを見て知るべし。抑は至聖は人。腹中既
ふ一部は易有ゆる。四千九百六變は卦も。我の丹田方寸は
間ふ繫辭まま。其耳目ふ觸ま。其思慮ふ感ある所。まべて
天下は故ふ通じて。一をたてて爻を生じ卦を立るのら然物
れ。疾がびま速く。行交して至ま。何ぞも筮儀ふ拘は
ぬふ足らむ。實ふを機ふ臨み變ふ應じて環觀活用する中

尔。筮法の眞式は具は依事れり。但し己篤道はも。唯尔此道
字窺する耳こそ有れ。然る位域はしも。九天の上字仰ぎ九
淵の下は臨むが如く。亦まど。今とり後習慣年を踰え。積熟
功字經とらむ。今此仰ま窺ふ物や。卑く。今の臨み觀る
物や。浅から年事を。負氣無まど。庶幾ひて。傍聞を憚らば。
かくを言奉。けて師に上る委く辨子給るる如く。天地の間
形次も亦も。尔活をし活き生をし生ふ物に盡く。各々一生本命に卦あ
り。年々の卦あり。節々に卦あり。細く推し。精く求むる時を。
一日一時一刻に卦さず。具足兼備して。造次も離れぬ。顛
佈も去らぬ。脗合密著して。火は燥あり。水は濕有るが如く。
皆それ性命と成る事也。即て天極を坐す。太祖參神の賦與
し給ふ所にして。是ぞ謂も依天命也。この三神に由來及
び天命の本義也。我

の師の諸書ふとりて。始免て玄の又玄。妙の又妙ある旨。然
此著明ふ成まること。今ハ人も普祕く知まるが如し。まバ常は能く此天命を知りて。其時處位を即て。よく能く
其天命を奉じて之を率む。之を據て。育る悖逆乖違せざる
者も成人と云む。其否げる者を小人と云ふ。是を以て大は
爲す也有り。行ふ事有ぬ非ざるまバ。著我撰字を畫して。
問筮ある事を用む。或して之を我が天命を求むまバ。稽疑
の方備を定め。尚占は道虧る事れぬ。儼然として違ふる
のらば。確乎として拔擢うらば。争てう爲る事あり。行ふ事
ある毎も。問筮ある多いて。真正の徳を喪ひ。卦吝は咎を招か
む也。此を世に周易學者。たとむ日家者流あるどの。能く知る

所非ざはれ也。

八 易之興也。其當殷之末世。周之盛德邪。當文王與紂之事邪。是故其辭危。危者使平易者使傾。其道甚大。百物不廢。懼以終始。其要无咎。此之謂易之道也。

此第八條は繫辭傳を採りて載せり。是謂ゆる易を周易と云ふ。三易を通じて云はれず。抑周易は興りては。姫昌が姜里を囚はまし間の擧げらる由は。既論ふ如く諦なる事ぬるよ。此文はかく分明ならざるを。何なる由にらむや言ふ。其姜里を拘はまして作れりと言ふ事。その實事たる有まざる。其史遷が謂ゆる陰謀は一術ふし有れず。周は文武が殷

此天下を奪ふに就ては。陰謀術計多かりし事。史記の周本紀。殷本紀及び呂望姫旦らが世家を始め。其餘の書も。弘く照應し考ずる。赤縣太古傳。春秋命歴叙攷。三曆由來記。西籍慨論。あどふ。委く論ずるを見らるべし。其末世に至る。右にその文籍も。其密説をも著せま。其盛れりし間。姫昌が姜里を囚はまし時。此作と顯る言ふ事を。憚れる故。態とかく引きて放る。然る文法を以て。其作者を分明にらぬ。趣云はれぬ。然し繫辭傳に。周の末世に集書れ思ふ人も有む。其に此傳を載せる説等。此に當り。何れとまざる。諸説を聚めし物なまざるあり。故は。文の外も。易之興也。其於中古乎。作易者。其有憂患邪。稽其類。其然まざる。書名を衰世之意。邪あど様云ふ語ども多加り。

周易を題せる上。殷は末世。周の盛徳ある時と指し。當文王與紂之事。邪と云ふまじ。其作者は。姫昌を除きて誰ら有

むと誰ふも見取ふく文ぬめ。其を信ふも其象辭に危き事
以ても逆意を含める姫昌が作と著明に知る事ふこぢ。
然るを伊藤長胤が讀易私説右の語等々引きて此人之
言文王也非文王自言也荀子史遷及緯書亦有其說文中所
言如王用亨于岐山箕子之明夷等此武王克商以後之事故
馬融陸績等諸儒以為周公作爻辭自是以來其說一定朱子
雖知其無明據亦姑依其說後世學者一遵其說而不知其有
不可詳者焉と云はる象爻の辭を姫昌父子が作と為てた
其文中の逆意を明かす見えて己が憲章を立とする人れ心配
成るが故あり儒を以て家業を立とする人れ心配をた実よ
然も有べき然らば其象爻に辭ふ姫昌が逆意をさし狭め
事ふおそ。然らば其象爻に辭ふ姫昌が逆意をさし狭め
証文の著明ぬる有やと言む。其は上下篇に乾とゆ未
濟ふ至る六十四卦に辭ふ。一卦も其意を含まぬは無まど。
其を逐一論むを煩はし。今それ尤ま云む。はち八卦

の方位を錯置せるおと。其逆謀に張本ふ為むを結構あ
是と古く連山易ふを艮を首と為し。滯藏易ふを坤を
首と為すは有まど。其は卦順を云ふ時の言よこそ有れ
其方位を改易せるよた非交。姫昌が易よハ卦順を伏羲の
乾坤震巽坎離艮兌を用ひよまど。其方位をしも前條よ云
ふ如く改いで其由を彼国圖を檢察にるふ。殷王が都を冀
州と云ふ地ふす。赤縣州の總国ふ取てた。丑寅巽の方位
に在て。謂ゆる孟津に大川。その東南西を廻す。姫昌が本
国岐周の地を雍州と云ふ域内ふて。彼總国ふ取りては。戊
亥艮に方位ふ在りて。孟津に南ふる。豫州と云ふ邊までを
領せぬ。然るよ己が領する豫雍の西南とゆ。冀州の東北を
逆せむ事は古説に謂ゆる神明之舍を犯す怖れあり。東北

を神明の舎と云ひて、古く畏み尊めり事を種々此書とゆ
證を引きて、赤縣太古傳に委しく云子まバ今更に云はば
加於世に普に忌む畏る。鬼門に方あれば、然る大事を
擧げよ宜はし非と。其從類は始まむ事を思ひて、其本固
に戌亥に乾を配し、殷地の丑寅に艮を配し、乾は天位と
す。艮は山を厭勝を義に翻按して、民心安むる術計を
ぞ有けり。其を既濟の九三、高宗伐鬼方三年、克之、小人勿
大固と爻辭せるを以ても、其心配を察せし、鬼方を即ち鬼
門に伐て丑寅を配し、高宗とハ殷代中興の主なる此代に其鬼
方を伐て功の運かりし事を鑒みて、大人を斯の如くあま
む。況て小人に用ふる事勿まを誡めたるあり。震用伐鬼方
云々も其義を震を古方位にて未申れ。殷都をり鬼
方に向ふに其都は未申ふ在るが故に、語り傳ふに古
説を周の擬方位に轉語し、あらず載せる文あり。然るに舊
説に震を進と釈せる説は非あり。予が見たる註書どもあり

此、鬼方ちふ語を解し得て、何くれと云ふ説、ちて姫昌が
ども有まど、都て論ふるも足らぬ説ありかし。ちて姫昌が
乾卦は象辭を乾元亨利貞と係とるを、姜里の拘囚を遯ま
て、乾位に處る用意の語をて、其文意を、朱熹が本義を元
大也、亨通也、利宜也、貞正而固也、文王以為乾道大通而至正
故當得大通而必利在正固、然後可以保其終也、を説と依ぐ
如し。伊藤長胤が言ふ、王輔嗣程伊川、解皆隨文言首章之意、
分作四德、至朱子始解曰、大通而利在正固、則固得易象
之本意、而千古之卓見也、と云ふ、尤然る言あり。貞を説文に
ト問也、从ト貝、貝以爲贄、有正、神を贄してト問多あり。
純固正一、其問ひる從ひるその卦象、斯て此卦は象物に龍
を持重する義に用ふる文字あり。斯て此卦は象物に龍
を正故ふその子姫且、其六爻は辭を作ふ。龍をもて其
父姫昌と、兄姫發を自吾と、三人の履歷を比喩し、其占を

示せめ。其在乾元序制記。乾元亨利貞道之用也。文王比隆
興始霸。鄭玄云。文王比德於乾之隆盛。謂其龍
謀序錄。序王錄。著卦為六十。文王用其不倦。武發修其質素。周
公用其節序。三聖首乾德。各就乾元亨利貞。每遺夕惕若厲懼
後戒。文王自朝至於日昃。不遑暇食。是乾元不倦。武王承而行
乾之節。之不敢有。加是乾之質素。周公制禮作樂。光文武之業。是
序也。有法字。彖辭之更。其文辭不合せ。考予て知死
る然ゆ。此乾元序制記と云ふ書を易のいと古交緯書
よて全書傳たり。武英殿に叢書中ふ收あり。其在
初九潛龍勿用とは。姫昌かみ姜里を遯きて。本固る潛まゆ。
時を待ちて。龍徳を用ふる事れきを言ひ。九二見龍有田利
見大人とは。六韜はと史記。文王將田。史編布ト曰田於渭

陽將大得焉と云はる果して呂望字得る也。有系如く。呂
望始免て。謂もる在上比大人。姫昌が顧養を受るる字言む。
見龍を呂望を指せり。田とを田獵を云ふと。史記を合せ
考予て知る。古來に注はみあ非れり。取用する足ら交
九三君子終日乾々。夕惕若厲无咎と。序制記。文王用其
不倦と云ふ如く。恒る健々を自疆して息はぬ。惕若と恐懼
を爲し。時を不厲けまば事字舉交。唯そ此心構をれし。生涯
咎れきて死まふ字言り。此史記の殷本紀。西伯歸乃
西伯。西伯滋大。紂由是稍失權重とあり。論衡。周取殷之時。
太公陰謀。食小兒丹。教云。殷亡。兵到牧野。と有る。れど合せ
見て辨。はる九四。或躍在淵无咎とは。史記。見えある如く。
姫發かの父が遺意を扱て。三年に服畢めて後。姫昌が

木主カミレを車クルマに載せて自専ミカシふせざる心ありやて。太子發タチを稱し。紂コウを討ツクむと師シを起し。或ハ躍ワタらむと欲ホシせまど。未ミ天命テンメイ至らざと。龍リウの淵エンに潛ヒカむ如ニく歸キじし言コトひ。其コト尚書シヤウシヤウ偽古文ヘイコクブン泰誓タイシの孔安國コウアンクニ傳ツクふも。受命ウケメイ之年ノシ。至キ九年クニシウ。而シテ文王ブンシヤウ卒ス。武王ブシヤウ三年ノシ。服畢フクヒツ。觀ミ兵ヘイ孟津モウシユン以上ノ諸侯シヨウコウ伐ツク紂コウ之心ノシン。諸侯シヨウコウ僉キ同ニ。乃チ退ヒク。以示シ弱ニ。と云コト。予ヨリ。是コト初ハジメ度タクの出イ師シあり。師シ卦クハの六ロク五ゴ。長チヤウ子シ帥シ師シ。弟テイ子シ輿イ尸シ。貞テイ凶キウと云コト。此コト義イを係ケるコト。然シテ。後ノチ十ジュウ有ユ三サン年ネン。云コト。ひける年ネン。再シテ師シを起キして本ホン意イ遂スとコト。九五クニシウ飛龍ヒキリウ在天テン。利リ見ミ大人ダイジン也ナリ。下ノ九五クニシウ謂イハふ所コロ是コト也ナリ。九五クニシウ飛龍ヒキリウ在天テン。利リ見ミ大人ダイジン也ナリ。飛龍ヒキリウは天テンに在アル。死シ時トキを待マ得トて。謂イハゆる在アル下ノに大人ダイジン呂望リウシヤウを用ツクむて。遂スふそに君王クニシヤウを滅ホクしむ。父祖フソに素意ソウイを修ツクめ畢ヒツる。戎言シヤウふ。是コトを以ツクて序制シヨウセイ記キふ。武發ブツツク修ツク其質素シヤクソと云コト。予ヨリ也ナリ。大人ダイジンと在アル上ノ君王クニシヤウの稱ナリあるを後ノチはハ其德シキふ相サウ似ニたる在アル下ノの人ヒトを也ナリ。稱ナリある言コトと為ナり。九二クニニの大人ダイジンを姫昌キシヤウをけし。九五クニシウは大人ダイジンを呂望リウシヤウを指サシこと。是コトはふて辨ヘンず知チる。朱熹シが注ツクふ九二クニニの大人ダイジンを在下ノ之ノ大人ダイジンを為ナし。九五クニシウの大人ダイジンを在上ノ之ノ大人ダイジンと為ナるは違ヒふ也ナリ。次ツギに上ノ九クニ亢キヤウ龍リウ有アル悔クワイ也ナリ。姫旦キニタン己オノが上ノを云コト。依ヨるて兄ケイ姫發キハツが死シして後ノチも其姪ケヒの成王セイシヤウ誦シヨクと云コト。むし八歳ハシの兒コを補ホ佐サする由ユふる王事シヤウジを行ツクむ。其位シを奪ウバはむと欲ホシける也ナリ。其兄ケイ弟テイは輩ハイか。召シヨウ公奭コウシヤクを始め。其意シを知らる故ユ事ジを遂スぐ。悔クワイを爲ナせざる言コト也ナリ。姫旦キニタンが逆意ギャクイを知チりて不安フアンも思オモへる也ナリ。也ナリ。忌イ恐オソまし。あつと燕エン世家シヤ魯ロ世家シヤ字ジ見ミ通ツウして知チる。用ツク九クニ見ミ羣クン龍リウ无ム首シユ吉キチ也ナリ。其仇キウせし殷インに武庚ブコウ及キび我ガが兄弟ケイテイどもを誅シツして。我身ガミ事ジ无ム也ナリ。しを言コトむ。後終コノヘふ其意シを轉テウじて。文武ブンブが道ミチを節序セツシヨして。又辭コトを作ツクる。是コトを以ツクて序制シヨウセイ記キふ。周公シヤウコウ用ツク其

人ヒトを呂望リウシヤウを指サシこと。是コトはふて辨ヘンず知チる。朱熹シが注ツクふ九二クニニの大人ダイジンを在下ノ之ノ大人ダイジンを為ナし。九五クニシウの大人ダイジンを在上ノ之ノ大人ダイジンと為ナるは違ヒふ也ナリ。次ツギに上ノ九クニ亢キヤウ龍リウ有アル悔クワイ也ナリ。姫旦キニタン己オノが上ノを云コト。依ヨるて兄ケイ姫發キハツが死シして後ノチも其姪ケヒの成王セイシヤウ誦シヨクと云コト。むし八歳ハシの兒コを補ホ佐サする由ユふる王事シヤウジを行ツクむ。其位シを奪ウバはむと欲ホシける也ナリ。其兄ケイ弟テイは輩ハイか。召シヨウ公奭コウシヤクを始め。其意シを知らる故ユ事ジを遂スぐ。悔クワイを爲ナせざる言コト也ナリ。姫旦キニタンが逆意ギャクイを知チりて不安フアンも思オモへる也ナリ。也ナリ。忌イ恐オソまし。あつと燕エン世家シヤ魯ロ世家シヤ字ジ見ミ通ツウして知チる。用ツク九クニ見ミ羣クン龍リウ无ム首シユ吉キチ也ナリ。其仇キウせし殷インに武庚ブコウ及キび我ガが兄弟ケイテイどもを誅シツして。我身ガミ事ジ无ム也ナリ。しを言コトむ。後終コノヘふ其意シを轉テウじて。文武ブンブが道ミチを節序セツシヨして。又辭コトを作ツクる。是コトを以ツクて序制シヨウセイ記キふ。周公シヤウコウ用ツク其

節序と云子也。上九の亢龍を其身比し用九の羣龍を即ち

加は管叔蔡叔まよと討が子武庚祿父あど

よ喻子 けて坤卦の象辭ふ。坤元亨利貞。君子有攸往。先迷後

利西南得朋。東北喪朋。安貞吉。云云。依之。其擬方位ふ。坤を西

南ふ配せふ故ふ。此方ふを得朋と云ふ。東北は殷都の在る

方ふて。鬼方れるが故ふ喪朋をいひ。此卦を得てを殷侵し

難らまを貞ふ安否るを吉と凶と言依れり。本書右此文

中 此五字あるは決めて衍文れり。其を牝馬を。坤の象物ふ非

交如此ふ言を。書見の眼高からむ人ハ。自然からよ知

物ぞ。其を次卷筮儀に條ふ論ふ如く。殷世までは四十五策

を用ひしを。姫昌始て四十九策を用ひる。謂ゆる十八變

筮と爲るる。此を百筮中ふ一筮も。容易ふ坤卦に出づと

死筮法れるを。右に由とし有依るが故ふ。此卦の出ざらむ事

を欲して。殊ふ巧劣る筮法あるを。思ひ合せて辨ふべし。此

事 此ふ不第七章を委しく論す。まよ是ふ就る思ふ。責復

大過恒解損益夬萃巽に象辭ふ。利有攸往。云云。屯剝无妄

に象ふ。不利有攸往と云ふ。はと大有无妄大畜晉損節の交

辭ふ利有攸往と言ひ。遯姤あど の交ふも。不利有攸往と見え。中ふも巽及ぶ益に象辭ふを。利有攸往利

涉大川。云云。需同人蠱大畜益渙中孚に象ふ。利涉大川

と云ふ。訟に象ふを。不利涉大川。云云。依る思ふ。謙頤

謙頤 未濟の交辭ふも。利涉大川と見え。此をみれ殷ふ討入る決

斷の讖辭あるが。大川を渉る利を不利と云依る。彼都ふ

攻至ふふを謂ゆる孟津に大川を渉らでを入る能はざ。
是を以て其決斷を示さむ爲ふ。此辭をかく多く出せり。
文を更ふめ。今文も恒に山川を熟語として相對し云ふ。習
あるに斯はり大川を渉る誠めを云むるに利越大山ま
と不利越大山など云ふ誠めも無てを得有まじき事ある
ふ其辭の「どよ無た」は逆意の張本に作まる象爻の
文と忽ふ知る事ふて然しも此意ふ合せては啞ふ
堪とる父子に鹿漏よこそ有らまはと古今に學者一人
も此義ふ著とるが无き。ちて東北巽風は定位に艮を配
す。西北艮山の定位に乾を配せる意に然る考ふはふ。巽ふ
艮を重ぬまむ。山風蠱は卦と成す。艮ふ乾を重ぬまむ。天山
遯の卦を成るは此に加は美里に拘はまし時ふ。困る在
ける子等及び其臣屬ども相謀りて紂王に美女奇物を進

べて蠱感せしめ。姫昌が罪を贖すはふ。紂王甚く悦びて故
還せる耳に征伐を専らする事を許せまむ。姫昌を此
虎尾を履む厲を遯れて。岐周に歸りて陰に徳を修め。是
を新に正朔を立て。此を受命に元年と云ふ。遯蠱の二卦こ
に履歴ふ能くも符符す。此に史記の殷周の本紀及び齊魯
に上り引く孔安國の傳。然れば此遯卦は象辭ふ。遯亨。小
利貞。云ふ。蠱卦の象辭ふ。蠱元亨利涉大川。先甲三日。後甲
三日と繋ぎて。後大川を渉りて攻入る日撰をさす。示
しぬれ。朱熹が本義に。遯卦の注に。其占爲君子能遯則身
雖退而道亨。小謂陰柔之小人也。と云ふ。蠱卦は注に。蠱壞極

而有事也。蠱壞之極。亂當復治。故其占爲元亨而利涉大川。甲日之始。事之端也。先甲三日辛也。後甲三日丁也。前事過中而後事方始。然更當致其丁寧之意。以監其前事之失。と云ふ也。粗其旨字得る説也。但し蠱卦の説を早く鄭玄が注ぶ。辛也。取改過自新之義。後之三日而用丁也。取其丁寧之義也。と云ふは據まる説也。猶下ふ云を見るべし。斯て姫旦が此二卦の爻辭を繋る。即それ父の意を承ける。每爻をそれ履歷を節序して。蠱卦の初六。幹父之蠱。有子考无咎。厲終吉。と云ふ。遯卦は初六。遯尾厲。勿用有攸往。と云ふ。言也。餘爻の辭も此為準。予が知る。蠱辭の意を姫昌が美幹あるあり。然るは其子と云ふ。及び臣子ら相計也。紂王は美女奇物を進めて其父を赦さしめ。有子考无咎と云ふ。是

れり。儲あつ厲か。正しりと。未終も紂を亡ぼして吉なり。き。はと遯。辞は意を虎の尾を履める如く。厲き所を遯れとる。由る。尾厲を紂の警。予とり。勿用有攸往。と云ふ。此卦爻を得る。らむ。ハ殷地を討入る。用ふる事あり。まを誠。勉と云ふ。義也。けりて。姫發が殷を攻入る。父が示せる日取を用む。し。事也。史記ふ。十二月戊午。師畢渡盟津。と有る。て知る。此を甲尔後。と云ふ。三日。丁巳の日也。丁寧は意を致して。事を始。翼日は。て。師に。盟津を渡。畢ある也。但し。後。日。し。事。下。引く。顧炎武が説。見え。とる。律歴志。此文。己。日。を。指。して。庚。日。を。用。ふる。故。実。ある。思。ひ。合。せて。辨。ふ。べ。し。盟津とは。即。て。斯。て。紂。王。と。對。陣。して。克。る。也。二。月。甲。子。孟津の。こ。を。あり。此。日。あ。ゆ。と。史。記。ふ。載。せ。也。此。を。曲。禮。ふ。外。事。以。剛。日。と。有。る。日。撰。ふ。合。符。尤。是。は。と。姫。昌。が。示。し。遺。せる。日。取。ある。也。と。蠱。

彖。先甲三日。後甲三日。也云云。甲日。戎中。取也。朱熹。が

注。甲日。之始。事之端也。と云。亦。亦。相發して。辨。ふ。る。し。呂氏

武王。己。大川。を。渉。れる。時。も。殷。を。り。膠。鬲。と。云。ふ。者。矣。使

は。して。候。せ。け。る。も。武。王。見。て。將。以。甲。子。至。殷。郊。子。以。是。報。矣。

と。云。ひ。多。婦。ら。し。め。其。と。り。日。夜。雨。ふ。り。て。休。安。軍。勢。も。休。

ま。む。と。請。し。り。と。疾。行。し。め。て。果。して。甲。子。此。日。殷。郊。至。

日。癸。亥。夜。陳。甲。子。朝。誓。之。と。有。る。も。由。あ。依。事。と。聞。え。と。り。○

我。が。徒。尔。栗。原。信。充。と。て。適。甲。式。を。精。究。せ。る。人。あ。り。此。考。を

視。る。も。手。を。打。ち。て。此。を。適。甲。日。撰。を。用。む。し。物。外。ら。む。

と。云。ふ。争。で。去。を。推。試。し。て。云。ふ。日。撰。を。用。む。し。物。外。ら。む。

初。曆。術。も。多。推。る。も。果。して。適。甲。日。撰。を。用。む。し。物。外。ら。む。

困。を。厭。勝。せ。る。も。推。る。も。果。して。適。甲。日。撰。を。用。む。し。物。外。ら。む。

さ。ぎ。姫。昌。が。讖。文。い。り。お。る。畏。る。べ。き。事。外。ら。む。著。ち。る。革。卦

此。彖。辭。尔。革。己。日。乃。孚。元。亨。利。貞。悔。凶。と。云。る。也。紂。尔。打。克。て

其。首。城。斬。る。日。此。甲。子。尔。る。を。思。ふ。尔。甲。子。尔。素。懷。を。遂。る

とも。加。の。德。尔。慙。る。を。云。ふ。如。く。朱。熹。も。本。義。尔。變。革。之。初。

人。未。之。信。故。必。己。日。而。後。信。所。革。之。悔。亡。也。云。る。如。く。其。日

頃。尔。慙。悔。此。事。も。亡。お。む。と。云。亦。讖。文。尔。也。顧。炎。武。が。日。知。錄

二。己。日。乃。革。之。朱。子。發。讀。為。戊。己。之。己。天。地。之。化。過。中。則。變。故

易。之。所。貴。者。中。十。干。則。戊。己。為。中。至。於。己。則。過。中。而。將。變。之。時

矣。故。受。之。以。庚。庚。更。也。天。下。之。事。當。過。中。將。變。之。時。然。後。革。而

人。信。之。矣。古。人。有。以。己。為。變。改。之。義。者。儀。禮。少。牢。饋。食。禮。日。用

然れど湯武が革命ある順天應人の舉と云むや。實ふて天命時日ふ託せざる。欺天逆上は舉がる故ふ。湯誓泰誓はど此証言は有ふあり。其を湯誓の衆庶了告る言ふ。爾尚輔予云々と云ひ。太誓は衆庶了示言ふ。今予発維共行天罰。勉哉夫子。不可再不可三と云ひ。牧誓は。今予発維恭行天之罰。夫子勗哉。爾所弗勗。其于爾躬有戮と云ふ。あど見るべし。強ひて人を従はせめし事いと諦あるまや。斯て偽古文仲虺之誥は。成湯放桀于南巢。惟有慙徳。曰。予恐來世以台為口實。仲虺乃作誥と見えざる。果して後世を奪へば。然るもて武發まよ湯が子孫は紂王を弑して罔を奪へば。然るもはと呂氏春秋ふ。武王勝殷。乃恐懼太息。命周公旦進殷遺老而問衆之所說。民之所欲復。盤庚之政と有るを見る。己日乃孚。悔亡と云ふ。象辭の意を辨ふべし。唐因史補。高定貞公。郢之子也。年七歲讀書。至牧誓。問父曰。奈何。以臣伐君。答曰。應天順人。又問曰。用命賞於祖。不用命戮於社。豈是順人。父不能對。とあり。卓見あり。上第四條了引ふる。通卦驗は文ふ。周文

増通八々之節。以繫王命之瑞興亡殊方。各有其祥と有ふ語。此眞實なるあり。是を以て知はく。はと史記は日者傳ある。史遷が語ふ。自古受命王者。何嘗不以卜筮決於天命哉。其於周尤甚と云ふ。亦熟く味ひ讀みて。欺天のわざは。周尤甚し。かたし事字辨ふ。筮を以て。受禪は天命を決せる禪る所。お始めて見えて。既ふ本編論するの如し。曲礼は。卜筮者。先聖王之所以使民信時。日敬鬼神。畏法令也。所以使民決嫌疑。定猶豫者也。と有る。信了古説ある。或周ふ。此字甚しく用むし。故ふ。史遷はかく云へば。實然は説あら。や。ちて其象辭了。逆意を狭め。依危辭は多加る。其尤文件々を抄さば。師象。小師。丈人。吉无咎。小畜。象。不密。雲不雨。自我西郊。履。象。不履。虎尾。不咥。人亨。大過。象。棟撓。利有攸往。亨。坎。象

ふ。坎有孚維心亨行有尚明夷象。利艱貞節象。節亨苦節不可貞。蹇象。利西南不利東北。歸妹象。征凶无攸利。と有ぬ。あぞ。皆そ。け子。の。殷。字。討。む。時。比。讖。文。子。作。ま。る。姦。意。比。文。邪。也。郝敬。周。易。正。解。の。說。者。因。大。傳。云。作。易。者。有。憂。患。乎。當。作。非。也。と。云。ひ。て。此。等。の。辭。を。引。出。し。此。皆。文。王。象。辭。可。謂。不。危。乎。文。王。序。易。逐。卦。繫。象。周。公。承。考。逐。爻。繫。辭。公。嘗。自。言。文。王。我。師。孔。子。亦。謂。文。王。无。憂。父。作。子。述。即。此。類。也。今。檢。爻。辭。如。隨。云。王。用。享。于。西。山。外。云。王。用。享。于。岐。山。指。文。王。岐。周。也。明。夷。云。明。夷。于。南。狩。得。大。首。指。武。王。誅。紂。也。箕。子。之。明。夷。指。箕。子。為。奴。也。小。畜。履。隨。盡。皆。隱。用。文。武。為。象。婦。妹。之。九。五。泰。之。六。五。引。商。王。帝。乙。是。文。王。所。親。臣。事。者。也。凡。此。皆。足。以。徵。爻。辭。之。非。出。自。文。王。甚。明。也。蓋。周。公。相。武。王。誅。紂。伐。商。晚。遭。流。言。憂。患。與。父。考。同。故。摹。寫。往。事。真。切。如。此。後。世。過。信。班。史。故。蜀。才。改。箕。子。之。明。夷。為。其。子。或。援。爾。雅。紂。岐。山。為。二。達。之。山。非。岐。周。或。謂。帝。乙。為。成。湯。非。紂。父。皆。以。附。合。文。王。作。爻。辭。之。說。牽。強。固。抑。姬。昌。が。周。僻。皆。可。晒。也。と。云。予。る。を。信。不。然。る。言。ふ。也。加。し。抑。姬。昌。が。周。

易上下篇は象辭を作れる本懐。か。は。革。命。ふ。有。也。中。字。は。九。二。ふ。鳴。鶴。在。陰。其。子。和。之。と。云。依。如。く。長。子。姬。發。そ。は。志。字。果。し。次。子。姬。旦。そ。は。意。字。繼。て。六。爻。は。辭。を。作。れ。也。是。字。以。て。姦。意。偽。巧。至。ら。ぬ。所。あ。く。實。子。叛。逆。邪。謀。の。木。鐸。れ。け。也。但。其。象。爻。は。辭。ど。も。逐。一。ふ。其。事。を。行。ふ。時。ふ。其。卦。爻。を。得。て。而。し。て。後。ふ。其。事。迹。を。繫。こ。る。よ。た。非。ざ。ま。ど。其。爻。辭。は。姬。發。が。紂。に。克。て。後。の。事。迹。も。多。の。ま。ば。姬。旦。が。爻。辭。を。繫。る。時。よ。正。ふ。其。事。有。也。し。は。云。ふ。も。更。れ。り。斯。て。其。占。字。得。ざ。依。事。を。も。偽。巧。ふ。思。ひ。合。さ。る。事。字。バ。拾。ひ。集。繫。辭。傳。ふ。解。卦。は。爻。辭。め。て。爻。係。と。る。事。ハ。云。ふ。も。更。れ。也。繫。辭。傳。ふ。解。卦。は。爻。辭。を。評。し。る。作。易。者。其。知。盜。乎。易。曰。負。且。乘。致。寇。至。負。也。者。小。人。之。事。也。乘。也。者。君。子。之。器。也。小。人。而。乘。君。子。之。器。盜。思。奪。之。矣。上。慢。下。暴。盜。思。伐。之。矣。慢。藏。誨。盜。治。容。誨。淫。易。曰。負。且。乘。致。寇。

至盜之招也。云ふ字思ふべし。彼周易上下篇をも誨盜誨淫。此みふ非らば。謀叛弒逆の誨子也。殊るそ此要旨も有ける。其たか此日者傳れる司馬季主が語る伏羲作八卦周文王演三百八十四爻越王勾踐効文王八卦以破敵國覇天下と有る也。然る言ふて此勾踐が呉を囚てきて呉王が糞を嘗め囚とり美女財宝を贈らしめて其心多取り。遂に赦さまで帰まは後兵を起して呉を亡せる事。能くも姫昌を効むるを思ふ也。故は字以て彼蒙莊を聖人死ばまば大盜止むとぞ言ふ。其たかの成湯及び姫昌父子らぐ類ある擬聖字こそ言ふ。豈眞聖也しも。然云はむや。然れど彼囚はば。王統了定位あき囚ふ也。然も有らば有依るし。皇統無窮ふ續かせ給ひ。君々あり臣々ある。皇囚は人ぬぎの信し讀べき書ふを非ざ。皇囚は人ぬして。此を能く信し效びある也。北條義時れ也。然るを承久の時より前蹤あきよ非ざとて湯

武ぐあの革命の和ざ字口実として。天皇も敵對し奉り。鬻くも克參らせ。三柱は天皇を嶋ふ放らし奉まは是れり。何よ恐るべき。ちる本文の危者使平易者使傾云々也。彼事れらば也。上下篇の辭字。常は占判を用ふ依意定を云依ふて。其辭は危険ある也。平易も取ふし。平易ぬる字也。傾覆せしめ用ふ依時也。其道甚大也。百物よと廢闕なく。衆事悉く備はる也。殊る戒懼を存して終始まむ。其要咎ぬ交る歸也。此周易此道ぞとぬ也。今し僥倖の徒は強むて誇言して季主君平ぬ此に稱し十有八變の譎筮を賣てて糊口此料を得むと計る倫也。然して此易法を用ひむ事も敢て咎あき事ぬ也。然まど彼六爻占を十有八變は手術あそ事々しけま。實は俗も畧筮とて。著を撰ふ依ふ。八字以して内外卦字立て。まも六を以て

著を撰^カりて。變^カ文^カを立^タる易法^カを類^ニある拙法^カをぞ有^リけ^ル。穴^ヲ笑^ハしや。

三易由來記卷出下

大壑 平篤胤撰述

人門

駿河岡 新庄道雄

武藏岡 碧川好尚

常陸岡 竹來道彦

校同

九

孔子^ニ晩^テ而喜^ビ易^ヲ序^シ象^ヲ繫^シ象^ヲ說^シ卦^ヲ文^ヲ言^フ讀^ム易^ヲ韋^ニ編^ニ絶^シ曰^ク假^シ我^ニ數^ニ年^ヲ若^シ是^レ我^ノ於^テ易^ニ則^チ彬^々矣[。]

此第九條也。史記に孔子世家を採まゆ。抑孔子は晩而喜易を云ふ説を。儒者の嫌ふ事れまど。信る然有し事を種々思ひ合はる事ども有也。其を先幼とゆ好ある。禮容は事を問むと。周尔適まで。老子の門に入るは。莊子天運篇に孔

子行年五十一ニ而見老聃ニ有る時ハ也。孔子の老子ノ入門セる年頃ヲ或ハ七

七歳ノ時ト云ハ、依説ノ有ル依テ、史記ノ索隱ハ孔子ヲ適テ周

訪リ禮ノ時ト豈ハ挂ス十七耶且ツ孔子見老聃云甚キ矣道之難行也此

非ス十七之人語也乃既ニ仕レ之後、史記ノ老子傳云其時ハ事ヲ

載シて、老子曰子所言ハ其人與骨皆己朽矣獨リ其言在耳去子

之驕氣與多欲態色與淫志是皆無益於子之身吾所以告子

若キ是而己也誨フるル孔子甚く畏感スる事何レ依テ葛洪神

仙傳云其事ヲ記シ依次子孔子讀書老子見テ而問之曰何書

曰易也聖人亦讀之老子曰聖人讀之可也汝曷爲讀之と叱カ

まる事も有也老子かく孔子ノ易ヲ讀スことヲ叱マる也易

所ル非成聖ヲ求ム人也其深理ヲ知ス也態色ノ徒ハ得テ悟ル

加テ其驕氣ヲ抑ムとノ教術也然まど後ハ其旨字も

云ハ誨セる事と疑おしそレ禮記まと家語おど也老子子ノ

聞クる由也孔子ハ易理ヲ語スまる事も往々所見とる小

て知はと論語也孔子ハ自記ス加テ我數年五十以學易可ベ

以テ無大過矣と云依事何レ也五十未滿のいまど易ハ義理

字能く會得セざる頃也語也依思合せて所知ス也伊藤

ガ読易私説云孔子以義理説易論と云ふ條ありて此語ヲ

引クる故知孔子之言易不以テ爲ト筮之書而以テ爲ス義理之書

て易を學ぶ。其易學に力不頼して。天命を知らざる義也。亦
之著し。其本編を記し如く。天命を知らず。易學の本旨を
まむれ也。此語の解を朱熹も既に天道之流行而賦
於物者乃事物所以當然之故也。知此則知極其精
而不惑又不足言矣。と云るが如し。よと易緯坤鑿度云。孔子魯人生不知易。偶
筮其命得旅。請益於商瞿氏。曰。子有聖智而無位。孔子泣而曰。
天也。命也。鳳鳥不來。河無圖。至嗚呼。天命之也。嘆訖而後停讀。
禮止。史削。五十。究易作十翼也。言其易法也。師於姬昌。法
且とも見えぬ。此全書を武英殿の聚珍板と云ふも出し
はまことる書あがら。此説を始め古偶筮其命は。人各々本
説と思はる。條々も少から。交。偶筮其命は。人各々本
命行年は天命を定れる字。偶爾時命の變を知む爲る筮を

立ふる義也。亦と。既尔本編を委曲せぬ字考す合也。亦と。
抑旅卦也。所住字去て處はる。羈旅の象也。其好む禮樂は
も。聖智ありとも位无き。東西南北此人よてた。行む得はじ
き道也。由字。商瞿ふ問ひて之字解也。其天命也。何とも為
る。らぬ事を嘆じて。其とめ見を改めて。禮書を讀むを
停廢し。春秋は史削る止ま也。五十は齡也。始て易字究
也。十翼を作する由也。然まバ史記自序云。孔子曰。我欲
載之。空言不如見之。行事之深切
著明也。と有る也。史削る就て云。語ま。と説苑云。孔子曰。成
人之行。達乎情性之理。通乎物類之變。知幽明之故。睹遊氣之
源。若此。而可謂成人。既知天道。行躬以仁義。餘身以禮樂。夫仁
義。禮樂。成人之行也。窮神知化。德之盛也。有ふ。易學。夫就
ての語。と聞ゆるを思ふ。此を共ふ。五十而知天命。と。後
此語也。然まバこそ毎尔替はて。其旨いと高尚也。聞

えゑ 十翼を云。本文も序象繫象說卦文言とある。象傳上下。繫辭上下。象傳上下。說卦文言の八傳も序卦雜卦の二篇も加りて十翼と云ふ。史記も序卦雜卦の名字漏せぬ。序とを孔子以前を在る。右は傳等を撫む聚め。序次を立て十傳と為る由あり。漢書藝文志も易經十二篇と有る師古注も上下經及十翼故十二篇を云ひ。孔穎達も正義も十翼者上象一下象二上象三下象四上繫五下繫六文言七說卦八序卦九雜卦十とあり。此も然る言もまど。楊雄曰。宓犧氏縣絡天地經以八卦。文王附六爻。然孔子錯其象而象其辭と云る。文王以下の說を非あり。然るも隋志も孔子爲象繫辭。文言序卦。說卦雜卦と記し。今此坤鑿度も孔子作十翼と云む。諸書も十翼此文を引用するも。孔子曰。飢と云ふも。悉誤あり。序と云るも。豈りち任

せて作と云むや。然まど漢以來誰も十翼を孔子は自作と云ふも。歐陽脩も周易童子問と。伊藤長胤も讀易私說と。然まど其まど未だ盡さぬ。說ども多加り。其下論ふを見。儲志も序次を爲むを喜み讀めふも。韋編を三まき絶損をまど。心も應ふ如く。序を爲得ざりし故も。亦我も數年此假ありて。是は如く。勞たぬ。我も易學も於て彬々るらむ也。意も快からぬ。由も嘆きしあり。孔子の易も叙む。論語緯も考識も。孔子讀易。韋編三絶。鐵撻三折。漆。書三滅とも見あり。史記の文は是も依まらむ。はて上此坤鑿度も。孔子は易學も。姬昌を師せし。姬旦も法と依も。有るも就て思ふも。尚書も孔安國も序も。古者伏羲氏之王天下也。始畫八卦。八卦之說謂之八索。求其義也。先君孔子生

於周末讚易道以黜八索と有八索之。本編云云如之。本
命行年比八卦各々年々八索して。八々六十四卦と成也。
そ比六十四卦よと毎年比八節も變化して。六十有四を成
は古法あり。そは此文の正義も。以て易八卦為主。六十四卦三
百八十四爻皆出於八卦就八卦求其理則萬有
一千五百二十策天下之事得故謂之索然るを孔子加の姫
非一索再索而已とあるよても知れし。昌父子が六爻判斷比周易を讚して。八索の古法を廢黜
せる由れり。其を論語も信じて古を好むと言ふ語は有ま
ど。其性元と古道を好まば。常道を好む學僻をまば。此を
學ぶはじき非事ふよそ。かく言ふを不審み思はむ。けりて其
序次多と云ふ十翼の中も。彖傳上下は。姫昌が彖辭の傳。

象傳上下也。姫旦が爻辭比傳れるが。其彖爻の辭をもふ。採
用ははじき上は。況て其傳を云も更れまざ。彼彖傳を實よ
孔子の自作ふやと思ふ由れり。其を大哉乾元萬物資始至
哉坤元萬物資生れど様の讚語多たが。讚易道と有はる叶
む。か於湯武ら比擬聖も善を誣ある説の有るが。此人の學
風も合符也。湯武らよ善を誣とりと。彼革卦比傳も
天應人と云る類を云ふ。お論語を始め諸書も此人の成
湯文武らよ善を誣とる語を數ふる暇あらば猶不審く
答ふべし。次彖傳上下。是はと彖傳と同口氣あるを。孔
子比作れるはく所思の中も。大象とて乾も天行乾君子以
自彊不息と云む。坤も地勢坤君子以厚德載物と云る類の

六十四章を疑ひ、太界氏以來に象辭を轉傳口誦し來れ
るをい、と古き世に筆記せし物あり。其に姫昌が象辭の危
温雅此文にて法象を云ふと易簡にして其趣意の善く諦
ふ通え、うの象此文等の謎を解くが如き類あらざる實直
平和の文あるを以て古象辭いで其由を、おぼ彼六十四章
に遺訓あると先所知り、い、を大象と云ふ也。一卦の大象は云ふ文あり故に名あるが
謂ゆる象傳中ふ錯出せる由來。い、のふと稽ふは、姫昌加
此象辭を作して、卦々に下ふ載し、姫昌そ此文辭を作し、
後を、其周易にみを用ひし故に、大象の辭は古にハ、自然
ふ廢きある也。孔子に象傳上下篇を作する時しも、其を惜し
みて、彼象傳の每首章ふ標し出せる物と見え、然るハ、
彼象傳

はも、爻辭を釈せる傳れまむ、爻傳と號くべき、象傳と号
けし、其首章に標出せる大象の文字、旧く象と唱ふ來れ
る、隸せる故の名と聞ゆ、然らむ此、大象に、孔子以前に在
る、象をも、思ひ合はざる、然る、し古文ありと云ふ、何ぞ以て知ると言む、春秋昭公が
二年に左傳ふ、晉に韓宣子が魯に來聘せる時、此事を載し
て、觀書於大史氏、見易象曰、吾乃知周公之德、與周之所以王
也。と有る、易象に、乃、は、大象此文に見ある義あり、今に謂
ゆる、姫昌が爻辭、及び其傳を謂ふ、は、非也。但し是、言ふ、吾
乃、知、周、公、之、德、
與、周、之、所、以、王、也、と云ふ、は、大象、辭、の、温、柔、ふ、し、て、危、厲、ハ、
義、あ、る、が、此、を、周、公、が、作、と、然、る、に、伊、藤、長、胤、が、周、易、通、解、
も、今、と、相、似、る、説、を、出、し、て、右、の、左、傳、を、引、き、孔、子、時、年、十

歳象之作蓋在孔子之先矣。と云ふを信然る説あり。後

讀易私説多見まハ先儒以十翼為孔子之作故以韓宣子所觀象者為指爻辭然爻辭之流行于諸國久矣列國士大夫皆能言之載在左氏傳晉獻公嫁伯姬于秦史蘇占之引婦妹之羊之辭僖十五年秦卜偃筮秦伯將納王曰公用亨于天子之卦也襄二十五年齊崔武子筮取棠姜陳文子引困于石據于蒺藜之辭可見爻辭於諸國久矣何得謂到宣子始觀之哉と云ふは是も通然らば此大象辭加此周易の爻以後の物

加と言ふも夫と爻遙る以前の物あり其を何ぞ以て云ふまじむ本編の註せる如く象字もと南越此大獸此名ある字想像の義に假借せしめて八卦此作れる當昔遠のら然世と爻用けむと所思は文字あまじと象は然らば此を疑なく姫昌ぐ其作まる卦辭此名あり始めて假まる名と聞え

也。然云ふ由た有ゆる古書ども周易上下篇の象辭より外に形容の擬する事あり象と云ふ言を一とあること無きを象字ハ今に至るまで普く形容に抑象字を説文に義を用ひ來まじを以ても辨ふべきあり

豕豕走也从彡从豕省韻會系徐曰象形繫辭曰象者材也謂

卦中剛柔之材陸氏曰象者斷也毛氏曰从彡彡頭也象其銳

而上見と見え楊慎が外集に象亦曰豕犀狀如犀而小角善

知吉凶交廣有之土人名曰豕神犀形獨角知幾知祥是則象

者取其幾也と言ふ也まよと留青日札に象者修豪之獸豕類也頭銳而上見故象居卦爻之首豕走

断然不疑故象能決断一卦之體或曰象名豕犀形是等此説小獨角善知吉凶故曰豕神出于南荒とも言へり

ふ依まじバ舊來此大象象字を假借せるとり思ひ著て此獸の名を借て己が新作せる辭此名を為るなり也然れ

と假令象と名けるも語を革ま。そは卦徳の大體を云ふ。即象辭ぬるが故。繫辭傳ふは。象者言乎象者也。も見えぬ。是何。大象は象辭を古き明證あらざや。長が通解ふ。先子謂象既解卦辭故象不復解卦別就上下二象取義如天行健地勢坤然則象之作其在於象之後乎と云ふ。思はざるあり。然らば大象を殷世の辭あるかと言ふ。尚夫とめも以前は物ぬれ。其は何を以て云ぬま。殷小用ふる歸藏易の卦名を。既ふ云ふ如く。今は卦名をハ大抵異ぬま。ば。大象辭もし殷世に記さむる。其卦名を用ふる。き。然らぬ。決めて夏世の筆記あり。上の第四條に引くる禹代之作。歸藏之文。湯代之作。周易之文。文王之作。と有をも思合せべし。其を夏用ひふる連

山易を。今は卦名と全同じぬ。大象の卦名を。そを用ひふるを以て。著明あるが上。そは六十四章の文。君子大人と稱し。或は君子と稱し。或は后とも先王とも。稱せるを以て。疑ぬ。く。夏世の筆記を推量られる。也。大象の文。凡て六十四章。有。四章。中。七章。先王と稱して。事業を挙げ。二章。后と稱し。一章。大人と稱せるが。其餘の五十四章。ハ。こ。あ。君子。以。云々。と云。たり。是を以て。其。然る。を。君子。と云ひ。大人。と云ふ。を。赤。縣。太。古。傳。を。量。ま。す。也。小云。如く。皇。罔。は。故。實。と。め。起。す。也。太。冪。氏。の。當。昔。と。め。王。侯。の。通。稱。を。云。む。效。子。の。言。ぬ。ま。を。大。象。辭。に。口。授。あ。す。し。間。を。君子。とも。大人。とも。誦。し。傳。す。る。む。を。夏。世。と。す。後。ふ。先。王。后。ぬ。ぞ。云。ふ。語。を。め。交。す。て。傳。す。け。む。大象辭の古く。口授して傳へるむ事。を。既

引ある乾鑿度。伏羲氏始作八卦。質者无文。以天言。此易之意。とあるを始め。數の書。よさる意。むへの見え。とる。よて知。其を彼。大象也。先王以云々。有る事業。どもを視。協ふ。多くは夏禹以前の王者也。履歷。合子。協を以て。夏世の筆記。尔疑無し。とは言ふ。然れ。其先王と称せる條。く。先王以建之。上帝以配祖考。先王以省方。觀民設教。先王以作樂。崇德。殷薦。王以至日。閉關。商旅不行。先王以茂對。昔育。萬物。先王以亨于。帝。立廟。祭。見。后。と称せる條。々。ハ。后。以。裁。成。天。地。之。道。輔。相。天。地。之。義。以。左。右。民。后。以。施。命。誥。四。方。也。見。大。人。と。云。る。也。大。人。以。繼。明。照。于。四。方。と。見。え。て。此。也。皆。儲。そ。此。君。子。以。禹。王。以。前。の。王。者。の。事。業。よ。係。る。辞。等。然。れ。儲。そ。此。君。子。以。云。々。有。る。五。十。四。章。を。視。る。也。こ。れ。王。侯。不。涉。る。訓。誡。ある。が。引。伸。して。は。成。人。の。學。ぶ。志。を。立。協。士。庶。も。も。用。ふ。ほ。き。辭。等。然。れ。是。尔。因。て。思。ふ。よ。孔。子。晚。了。易。を。學。ぶ。て。後。也。能。く。也。

此大象を觀じ。熟く其辭を玩びて。其雅の言行をも。此辭も。本おけし事著れ也。語あるを孔子の雅也。大象も。本。如。く。重。き。士。庶。を。訓。ふる。也。君。子。の。比。乎。て。語。を。成。せ。る。と。り。後。終。小。庶。人。は。廣。く。云。ふ。言。と。成。ま。る。故。也。君。子。て。不。語。輕。く。あ。り。て。今。し。た。少。く。漢。語。あ。ぢ。して。儒。者。自。ある。ハ。村。学。窮。の。卑。人。ら。さ。へ。尔。誇。加。よ。君。子。の。氣。ど。り。杯。委。め。る。也。傍。痛。き。事。尔。こ。を。此。を。孔。子。以。來。此。事。ある。也。と。論。語。に。孔。子。の。自。の。ら。君。子。と。称。せる。語。の。許。多。ある。を。以。て。知。べ。く。案。を。君。子。と。ハ。王。侯。の。称。ある。也。と。大。象。也。文。を。更。あり。左。傳。以。然。る。也。論。語。也。多。く。五。十。歳。と。り。後。此。言。行。字。集。記。せ。る。物。と。見。ゆ。る。也。其。開。卷。第一。

ある。學而篇。此首章。學而時習之。不亦說乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不愠。不亦君子乎。と云。協。也。兌。此。大。象。也。麗。澤。兌。君。子。以。朋。友。講。習。と。有。る。尔。本。お。け。る。語。也。然。る。也。恒。

ふ悦懌を徳とし。慍悶ある事あきを主と爲る卦ある効
ひて。學びて時を習ふも悦び其學ぶたりて。學友の
遠方より訪来て。講習するも樂みなり。又然し。遠方より
訪来て。講習を爲す。朋も有る。此學尊き事を都て。知ら
ば。我々知る人無き。慍悶せざるも。亦君子此風。不らめ
やと。兌卦の象を觀じ。其辞を玩びて。自のら寓意せる語あ
り。見む人心を潛め。此を始末と爲て。論語中ふ。亦信ふも
言む得と。正と所思ゆる語。熟視ま。大象此辭。敷演
し。或を翻案して云。依ぐ半字過ぎて。加此一以貫之と稱し。
其第一義と立。象仁と云ふも。乾坤二卦の大象をとり。説出
る物なり。是も。五十以學易。可以無大過矣と云ひ。晚
して易を喜み。韋編を三絶し。鐵槌を三折せり。と云説の實
然る言。依字思ふ。論語中ある孔子の語。敷演翻案せる由
の辞。敷演翻案せる由多のる由

今逐一論さむも。最易き事。ハ有まど。所狭く煩げま
る。引別。古易大象經傳と云ふ物を著はして。其每章の注
見。引出る。斯て第二十堯曰篇の終章ある。不知命無以君子
也と云ふ語。澤水困。大象。澤无水困。君子以致命遂志
也。有る。本。振々る語。知命。易學。第一義あり。其
加の陳蔡。問。困厄せる時の様。亦。知。此時。子路。慍
也。君子も亦窮。是。此。時。琴。鳴。歌。ひ。て。在。易
の。大象。困。命。致。め。五十。天命。知。る。驗。有
る。然。此。語。を。終。章。出。し。首。章。兌。澤。大。象。據。れ
依。講習。此。語。を。出。せる。道。を。學。ぶ。と。講習。始。め。知
命。終。る。義。を。明。せ。依。て。論。語。撰。者。誰。り。知。ら。ぬ。能

くも孔子は志學とめ成學まで成。窺を識る撰者なりけ
也。論語の撰者多。有若曾參らぐ門人の撰と云ひ。或を撰損
等ら然説はて論語なる語ども多く大象は辭ふ。本はる也と
言ふ事を古今は學者は於也知げ事なる字。始て言出
多まむ。今忽ふ諾ふ人有はむじく。却て之が辨字作て。
大象辭と。論語を相似あるは。共る孔子は語ある故ありと
言ふも有む。然れど其説立がとき由る也。其を象辭爻辭
を。姫昌父子は作ふ。互る異義あり。其を釋せる象傳象傳
は。共る孔子の作ふ。本辭と其義の違はける中。唯か此
大象辭はみ。象爻は辭及ぶ其傳と。義理は相違せるが多の

依て是のみ古辭ある明證なり交也。今その相背ける事を
大象は山附於地。剝君子以厚下安民。と有まむ。是安重は卦
なり。象辭を剝也。柔變剛也。不利有攸往。と有て。吉卦
非也。ま履卦は大象は上天下澤履。君子以辨上下。定民
志。也。有て。專と。礼を説する。象辭も履柔履剛也。と云
る。今尽く挙る。象ある。卦なり。此。象辭爻辭を更なり。其象傳
爻傳とも。吉凶相間せる。大象の六十四章。之。象人
事。推て。教ふる。善道を以し。一も不善。涉る者。なり。是
は。み周易。関る。事。は。象傳。と。同。斯て。後。顧炎
武。日。知。録。字。見。ま。む。其。一。卷。ふ。孔子。論。易。見。於。論。語。者。二。章
而。已。曰。加。我。數。年。五。十。以。學。易。可。以。無。大。過。矣。曰。南。人。有。言。曰。
人。而。無。恒。不。可。以。作。巫。醫。美。夫。不。恒。其。德。或。承。之。羞。子。曰。不。占
而。已。矣。文の意を人として。恒の心あき者。巫醫を作らる
らば。と。南人の言ふ。信然る言なり。其は恒卦の九

四の辞、其徳字恒、尔せざる者、或之が羞を承くと云、
已と證して、恒の心、おき者、ハ、占はざらむ而已と誠然とる
あ、記者、於、夫子、學、易、之、言、而、即、繼、之、曰、子、所、雅、言、詩、書、執、禮、皆
雅、言、也、是、知、孔、子、平、日、不、言、易、而、其、言、詩、書、執、禮、者、皆、言、易、也。
人、苟、循、乎、詩、書、執、禮、之、常、而、不、越、焉、則、自、天、祐、之、吉、无、不、利、矣。
大、象、所、言、凡、其、體、之、自、施、之、於、政、者、無、非、用、易、之、事。以上の説
み、人、の、云、さ、る、事、お、て、信、は、然、る、言、れ、り、是、を、り、以、下、め、繫、辭
傳、多、直、み、孔、子、の、作、と、思、ふ、る、の、み、非、お、ま、ど、其、餘、ハ、之、れ、理
ま、と、る、説、お、り、儲、是、は、就、て、案、ふ、論、語、お、其、門、人、ら、此、言、お、
夫、子、之、文、章、可、得、聞、也、言、性、與、天、道、弗、可、得、聞、也、ま、と、子、罕、言、
利、與、命、與、仁、お、ど、有、る、も、皆、易、道、の、深、理、お、涉、る、
事、お、る、故、は、容、易、は、云、げ、已、し、事、と、聞、え、る、ゆ、
故、其、作、繫、辭
傳、於、悔、吝、无、咎、之、旨、特、諄、々、焉、然、辭、本、於、象、故、曰、君、子、居、則、觀
其、象、而、玩、其、辭、觀、之、者、淺、玩、之、者、深、矣、其、所、以、與、民、同、患、者、必

於、辭、焉、著、之、故、曰、聖、人、之、情、見、乎、辭、又、曰、出、入、以、度、无、有、師、保、
如、臨、父、母、是、孔、子、之、易、也、云、云、予、が、意、字、得、る、説、れ、ま
む、今、の、要、お、る、語、と、も、攷、撫、ひ、て、抄、し、お、
此、お、替、已、て、長、胤、が、
通、解、及、び、私、説、お、ど、
ま、稽、魯、論、所、載、子、所、雅、言、詩、書、執、禮、乃、曰、興、於、詩、立、於、禮、成、於、
學、此、夫、子、平、日、所、為、教、者、也、其、言、及、于、易、者、僅、有、可、以、無、大、過、
之、言、耳、又、且、曰、加、我、數、年、則、其、事、似、緩、觀、十、翼、所、言、易、之、於、人、
道、極、其、深、奧、極、其、切、近、不、可、斯、須、離、非、詩、書、之、可、比、此、其、旨、不、
同、吾、寧、捨、繫、辭、而、從、論、語、と、云、る、を、論、語、字、宇、宙、第、一、之、書、と
思、ふ、る、維、楨、が、子、お、し、て、其、父、此、言、は、從、ふ、を、生、涯、の、意、を、為、
る、依、故、お、ま、ど、顧、炎、武、が、説、お、は、比、お、べ、く、も、非、終、狭、見、れ、り、
然、を、有、れ、ど、皇、國、の、儒、者、は、此、人、を、お、り、精、学、お、る、ハ、無、已、し
か、ば、此、人、の、説、お、み、を、か、く、往、々、論、ら、ふ、れ、
ま、ど、其、餘、を、大、う、と、論、ら、ふ、も、足、ら、ぬ、か、し、
以、下、は、諸、篇、も、孔、子、此、作、れ、り、と、云、お、お、漢、以、來、宋、お、至、お、
ま、で、異、論、无、已、し、を、歐、陽、脩、が、周、易、童、子、問、と、云、ふ、物、も、童、子

問曰係辭非聖人之作乎。曰何獨係辭焉。文言說卦而下。皆非聖人之作。而衆說淆亂。亦非一人之言也。昔之學易者。雜取以資其講說。而說非一家。是以或同或異。或是或非。然其傳已久矣。故雖有明智之士。或貪其雜博。之辨。弱其富麗。之辭。莫得究其所從來。而覈其真偽。と言ひて。は於其繁衍叢脞。を以て數說を出し。其一乾の初九。潛龍勿用。と有るを。文易。知坤。以簡能云。と有るを。同傳。易簡。之善配。至德。云。或夫乾。確然示人易矣。坤。隤然示人簡矣。云。は。夫乾。天下之至健也。云。といひ。其三。同傳。六爻之動。三極之道也。と云るを。は。易之為書也。有天道有人道。有地道。兼三才。而兩之。云。といひ。ま。說卦。亦同。說を出し。其四。係辭。聖人設卦。觀象。係辭。焉。而明吉凶。云。云。と有る。是。同傳。亦。は。辨。吉凶。者。存乎。辭。ま。係。辭。焉。以。斷。吉凶。云。云。或。夫。易。有。四。象。所以。示。也。係。辭。焉。所以。告。也。

云々。は。と。設。卦。以。盡。情。偽。係。辭。焉。以。盡。其。言。云。々。と。有。る。杯。字。舉。多。り。凡。此。數。說。者。其。畧。也。其。餘

辭雖少異而大旨則同者。不可以勝舉也。謂其說出於諸家而昔之人雜取以釋經。故擇之不精。則不足怪也。謂其說出於一

人。則是繁衍叢脞之言也。其遂以為聖人之作。則又大繆矣。と言ひて。次。子。乖。戾。相。容。ざ。る。說。多。も。出。せ。り。但。し。中。亦。有。る。案。お

說も。無き。非。非。と。論。む。得。ざ。る。說。等。也。斯。て。其。下。亦。係。辭。者。殊。小。多。加。ま。さ。ぬ。今。し。其。文。を。引。出。せ。れ。む。

漢初謂之易大傳也。至後漢已為係辭矣。謂之聖人之作。則僭偽之書也。蓋夫使學者知大傳為諸儒之作。而敢取其是。而捨

其非。則三代之末。去聖未遠。老師名家之世。學長者先生之餘。論雜於其間者。在焉。未必无益於學也。と云る。を。信。然。る。言。お

正。此文、繫辭傳を漢初、易大傳と謂ふと云る也。史記の自序、易大傳、天下一致、而百慮同歸、而殊途、有正義也。張晏云、謂易繫辭也。と云る説、據りてかく言たり。經典釈文、大史公論六家要旨、引此文、謂之、易大傳、班固謂孔子晚而好易、讀之、韋編三絶、而為之傳、傳即十翼也。と云ひ。前漢郊祀志、劉向、語、易大傳、曰、誣神者、殃及三世。云、語も有り。然、まど此、抑繫辭傳也。實、も名家、遺説、餘論、今、の繫辭傳、見、え、ば、字、聚、め、し、物、あ、て、全、く、を、孔子、此、語、も、非、交、中、の、太、暴、以、來、此、を、調、り、む、と、欲、せ、る、物、の、ら、彼、象、象、二、傳、の、作、る、專、と、力、字、用、を、て、此、傳、を、い、は、ぶ、と、序、次、を、爲、畢、げ、正、し、我、其、門、葉、後、人、を、そ、此、草、稿、を、言、加、り、杯、して、世、の、傳、り、し、物、あ、り、是、を、以、て、其、文、

中、の、顔、氏、之、子、如、と、言、ひ、子、曰、を、云、は、條、々、も、多、の、正、然、れ、也、繫、辭、傳、を、元、と、り、其、新、古、に、取、舍、形、と、て、叶、を、ぬ、書、れ、也。讀、易、私、説、よ、系、辭、曰、顔、氏、之、子、其、殆、庶、幾、乎、有、不、善、未、嘗、不、知、之、未、嘗、復、行、也、此、非、孔、子、之、言、也、禮、父、前、子、名、君、前、臣、名、弟、子、之、於、師、亦、然、故、夫、子、之、呼、諸、弟、子、必、稱、其、名、曰、參、曰、回、曰、由、曰、賜、而、未、嘗、稱、其、字、亦、未、嘗、稱、某、氏、之、子、若、使、系、辭、為、夫、子、之、作、耶、必、不、稱、顔、氏、之、子、史、記、載、孔、子、之、言、曰、顔、氏、之、子、使、爾、多、財、吾、為、爾、宰、者、亦、依、系、辭、附、會、其、稱、焉、耳、不、足、據、也、且、翼、易、而、稱、其、門、人、之、德、尤、可、疑、也、蓋、戰、國、儒、者、習、聞、顔、子、之、德、牽、合、同、也、屢、空、及、不、貳、過、等、語、以、發、明、不、遠、復、之、義、耳、と、云、ひ、通、解、此、釈、例、の、十、翼、之、興、或、先、於、孔、子、或、後、於、孔、子、後、世、湊、合、以、附、經、耳、と、も、言、り、り、実、尔、此、説、等、如、く、繫、辭、文、言、れ、ど、若、孔、子、此、精、撰、れ、ら、む、み、自、語、も、子、曰、と、云、べ、く、も、非、交、是、を、以、て、説、者、或、ち、此、を、講、師、の、言、と、し、或、ち、子、を、男、子、の、通、稱、あ、ま、バ、何、人、を、指、と、も、詳、れ、ら、交、杯、も、云、ふ、め、り、然、ま、ど、其、次、の、文、言、傳、を、長、胤、も、云、ち、上、件、の、謂、を、思、え、ざ、る、非、説、あ、り、
如、く、首、章、此、元、者、善、之、長、也、と、正、故、曰、乾、元、亨、利、貞、と、云、は、

で六十四字多。左傳の穆姜が語れり。斯て爻辭を解し畢
る後。乾元者始而亨者也云々。雲行雨施天下平也。云
ふ六十六字あり。此を彖辭と同旨の多本あり。文言首章
に錯簡あり。是を以て元者善之長也の章と其旨自おから
相半盾せり。然れど元者善之長也と云は首章を。後來の攙
入あると明けし。歐陽脩が童子問も早く首章に元者
善之長也といふ文字挙げ。此穆姜之語。
在襄公之九年。後十有五年。而孔子始生。又數十年。而始贊易。
然則四德。非乾之德。文言不為孔子之言矣。と云るも然る言
あらば。まは是れ依て思ふ。此を三易有正し以來。此古
説を孔子の集記せるが中。後來まは其門葉に徒ある。孔
子に遺説はと左傳中に語をも加りて。撰次せり物ある事

疑ふ。然まは童子問。首章に元者善之長也云々。此語を
以て。文言を一向に孔子以前の物と云る説を委のらば。ま
同書に童子曰。或謂左氏之傳春秋也。竊取孔子文言以上附
穆姜之説。是左氏之過也。然乎曰。不然。彼左氏者。胡為而傳春
秋。豈不欲其書之信於世也。乃以孔子晚而所著之書。為孔子
未生之前之説也。此雖甚愚者之不為也。云々とも言。此説
を能く次る説卦傳。隋に經籍志。秦焚書周易獨以下筮
得存。唯失説卦三篇。後河内女子得之。と有れど。今唯一篇あ
り。其或ら玉礫相半して。全篇を儘るに用ひ難き物あり。
清の毛奇齡が易小帖に説卦在漢時已亡。至考宣時河内女
子發老屋得之。至後漢荀爽集解又得八卦逸義三十有二。今
諸家所傳則皆逸義也。此非可意造者。故朱氏本義已其採用
補入。荀氏集解于説卦傳下と云るをも思合はし。其採用
未だき條々は昔者聖人之作易也と云ふ二章。天地定位。此

章。雷以動之の章。乾健也。坤順也の章。乾天也。故稱乎父の章
也。此六章此中亦も天地定位此一章を眞の古説と
せざるを視て。金科玉條よも比喩べき物あり。其ハ本篇よ註
て知べし。其餘此數章をみれば。蕪雜猥瑣あるが中。帝出乎
震云々此章を既云ふ如く。姬昌が偽方位此説をまじむ。故
曰。成言乎良と云はで。一切を掃除去る。餘を訂正補綴を
加す。擇む用ふべき事も無ふ。非交。朱熹が本義。此篇の乾为天。為圓。為君。父。為玉。と云ふをり。兌。為少女。為巫。為口。舌云々と云はで。を此章廣八卦之象。其間多不可曉者。求之於經。亦不尽合也。と云ひ。長胤が通解。亦も此章を評して。考諸經及象象之間。或見或不見。至於旁取。庶物則煩猥鄙瑣多不可曉者。蓋前世筮史之所傳。觸類而敷衍焉耳。以此為夫子之所作。則吾所未悉と云。信然。言等ふこそ。 次。序卦傳を六十四卦此叙を論じ。大象辭を相含みて。説を爲する

物れるが。早く王弼が弟子ら此言ふ。序卦。非易之綱と云む。
序卦。非聖人之書と云は如く。信用不足ざるまじ。長胤が
通解及び私説。論辨せる事あまじ。今更云は交。朱熹が
本義。此篇此み。一字此註字も下はぐるを。此も思ふ旨有
し事。然れど中。卦名を釈する説。次。雜卦傳
を。六十四卦之。會易反對相偶して。叙を爲し相雜して説
を爲せる故。雜卦と云ふ。此を彼童子問及び。讀易私説。ふ
云。汲如く。筮家此占書を見ゆるが。周易上下篇をゆむ。却て
て古説あるを。取收ある物と見えぬ。是を以て採用して。
少のら。儲かく思ひ續くまじ。十翼を之。孔子此自作

正と云ふ非ある事。おと絶て孔子に手字經し物非と云ふも。深く思はざは縁ある事を辨ふ。古今偽書考。景開祖儒志編曰。或曰。易繫辭果非聖人之言乎。曰。其原出孔子。而後相傳于易師。其末也。遠其傳也。久其間失墜而增加者。不能無也。と云ふまど。其失墜。ちて隋志。孔子の十翼を爲れる事を言ひ畢て。子夏爲之傳と云ふ説多記し。周易二卷。ト子夏傳殘缺。梁六卷と有まど。此を偽作れるまど。卷末小論ふ字視て知るべし。

十
自魯商瞿子木受易孔子以授魯橋庇子庸子庸授江東馯臂子弓子弓授燕周醜子家子家授東武孫虞子乘子乘授齊田河子裝及秦禁學易爲筮卜之書獨不禁故傳受者不

絶也。

此第十條也。前漢書に儒林傳を採ま也。史記の仲尼弟子列傳に。商瞿魯人字

子木。少孔子二十九歳。孔子傳易於瞿。瞿傳楚人馯臂子弘。弘傳江東人矯子庸。疵。疵傳燕人周子家。豎。豎傳淳于人。光。子乘。羽。羽傳齊人田子莊。何云くと有也。猶孔子とゆ。田河亦至ゆ。そは儒林傳をも合せ見て知るべし。

て。七世に傳來れ也。凡て此徒の傳記を。史記と漢書よ。右に如く載せる耳。他書に所見れし。中へ子弓が事を。史記

正義に。師古云。馯姓也。漢書及荀卿子皆云。字子弓。作弘。蓋誤也。應邵云。子弓。子夏門人といへ。信ふも子弓を荀卿が師の書に。聖人を語まど。孔子子弓と稱せり。其書に就て見ゆし。及秦禁學云々を。始皇本

紀ふ。其世に儒者ども。古より今を非ぬが多のる故ふ。

博士官外らぬ者也。詩書戎藏せる多。皆取て焼し。斲藥ト
 筮種樹の書此み字去交斯て其禁を犯せる儒者。四百六十
 餘人を生外のら坑埋死す。殺せりと有依時云ふ。漢書
 林傳師古注云。其坑の所ま埋めある事も委しく見え
 たり。始皇が此舉を徒爾謂あき惡逆此おと。世々よ誹まど。
 宋ネ子細有正し事あり。其を西籍慨論云ふを見る。ちて商瞿が古也。史記漢書
 不たかく孔子ネ易傳を受るりと有るを。易緯坤鑿度此傳
 牙は此と甚く異よしして。前條ネ注去依如く。孔子生不知易
 偶筮其命得於請益於商瞿曰子有聖智而無位。孔子泣而曰。
 天也命也。鳳鳥不來河無圖至。嗚呼天命之也云々有正て。
 是とゆ後。五十比齡ふして。易を究めある由を載せまむ。易

學ふ於て也。商瞿却して孔子とゆ先進ぬるおと炳く。史記
 を易緯と其説此是非を決難し。故そ此二方ネ考ふ依ふ。
 先史記を捨て。易緯を取むふ也。商瞿を孔子よ易學を導け
 る師ふおそ有ま。弟子ネを非ざる哉。強ひて其弟子傳ふ出
 せりと言はむ。其を史記の孔子世家ネ弟子蓋三千焉。身
 更あり。六藝よ通ぶる者七十有二人を云ふも。宋事よは非
 也。然るに彼弟子列傳ぬる三十五人を史遷が文ネ聞見于
 書傳と云ふ能く視ま。顔路公伯僚を始め弟子おらぬ
 者も數人有正て商瞿も其中に入あるが。總てを十人計に
 も信らまぬ名字あり。況て其下ネ舉とる四十二人ハ己よ
 史遷も不見書傳とて。只其名字を此み列せり。然て家語の
 七十二弟子解云。史記の弟子傳を取むる事疑ひ無れど。人
 名互み出入ありて。史記ネ疑はしく思ゆ。依公伯僚が類を
 む省たり。然ま。史記此弟子傳を強て七十餘人の數を得
 むとて。謾正よ諸書とり拾む集めある名よぞ有る。然ま

ば商瞿も宋を易学の師ありしを弟子列ふ取らまるとも亦知べのらば其を孔子世家に顔濁鄒を受業の門人と稱し。後の文翁孔廟図と云ふ物も林放蘧伯玉を入れて七十二人此數を合せるとも思ふべし。宋に三千此弟子有あむ。七十二年然しも事缺べくも非ざりし。抑三千と云ふ數を宮女三千威儀三千と云ふ類ひふ千の大數を云ふ時の語七十有二と云ふ數をも八節に象する八卦を配せるとり起りて五十を多く過ぎ百を多く足ざる數を云ふ時の語よて女媧氏七十二變はと云ひ神農七十二毒亦當ると云ひ伊尹が湯に七十二說を言ひ或は七十二毒固は周流を云ひ或は七十二戰を云ひ或は漢高祖が股を七十二の黒子ありと云ふ類ひ孔子の弟子は七十人など有と云ふと云ふと然る云ふあり然るまば宋事を云むと必す三四十人の弟子有らむを推して七十二弟子と云ふこと知べし。然るもあむし宿まる顔濁鄒蘧伯玉或は林放公伯僚れと字さ牙に拾ひ收れて強て七十有餘人を挙ふるも何れ可笑き事らば然るまば商瞿を弟子と云ふとも疑はし。はと或は今此本文ある。史記の説を助けてしき事よこそ。

易緯を和會して説を爲はむ。孔子そ此易學を商瞿とても後進ふる。此學を入ふる頃あそ。益を商瞿に請ふる事も有。執を固とて師徳秀才相兼とる人ある故。其晩學に慨み。韋編三絶鐵摘三折して大さる學を。終に却て。商瞿も其道を傳ふる計に此精學を至まゆと言む。其の師の知弟子の能く知まる有りて却りて其事を弟子より師に傳ふる類ひも常有。事ありて人を知るは己に其弟子より習ひ得て後を却りて己其道を精く成めて其弟子を教を反せる事も少らば。故に今ハ我が身の然る事實をり思む相してか。右二説のうち見む人擇むて用ふ。今人の情も適はむ。必す後此説あるは。然てもし此考を當にぬ。十翼は前孔子の序多し。稿を商瞿が受て。そ此己

が説字も加ふし故也。子曰、尔ど云ふ語よと顔氏之子あど云ふ語も有る。此を後人尔不能く考ふ。家語の七十
二弟子解ふ
る。商瞿が傳ふ。特好易、孔子傳之。志焉とあり。此説も
正くを志と云ふも有るべし。 儲はと
隋書に經籍志尔。孔子に十翼を爲まる事を記し畢て。子夏
爲之傳と云ふる説を記し。周易二卷。卜子夏傳、殘缺梁六卷
と擧る。然まハ漢書に藝文志尔。此目尔。後尔傳を十
卷に偽書尔。由也。古人既く辨る多也。
そは古今偽書考尔。子夏易傳、漢志無、隋志始有、子夏易二卷、崇文總目曰、此書篇第略、依王弼、式決、非子夏之文、其言近而不篤、然學者尚異、頗傳習之、晁子止、公武讀書志曰、景迂云、張弧、偽作、陳直、齋曰、隋唐時久殘缺、宋安得、有十卷、陸氏、釈文所引、隋子夏易傳、今本皆無之、豈直非漢世書併、非隋唐之書、抑子夏は、孔門の謂ゆる十哲に一人尔也。

卜商字、子夏と云むし人ある。此、人ハ易學を傳ふしと云、
おぞ諦れる所見尔。劉向説苑の敬慎篇尔。孔子讀易、至於
損益、則喟然而歎。子夏避席而問曰、夫子何爲歎。孔子曰、夫自
損者、益自益者、缺吾是以歎也。云々とて、損益の卦象尔托し
て、學者に損益ある義を訓ふし。子夏曰、善請終身誦之。
と云る事を載る。まど此を易傳を受る。ゆと云ふ計也の事
尔。非交是を以て史記に弟子傳尔も、其事を載さ交。
但し其、子夏文學著於四科、序詩傳易云くと有まど、傳易の事を詳尔ら、然事尔也。 孔子家語に執轡篇尔。
子夏問於孔子曰、商聞易之生人及萬物、鳥獸昆蟲各有奇偶、
氣分不同云々と易理を述て、敢問其然乎と云ふ尔。孔子答

予て然。吾昔聞諸老聃。亦如汝之言。云。俗說有之。易。爾精
志。趣。亦。ま。此。大。戴。禮。爾。據。爾。孔。子。此。語。爾。多。子。夏。子
之。非。交。凡。て。今。傳。は。る。孔。子。家。語。を。禮。記。の。諸。篇。及。び。大。戴。禮。
ま。と。劉。向。が。新。序。說。苑。お。ど。ま。出。し。る。說。ど。も。或。は。他
書。と。り。も。孔。子。の。語。を。拾。ひ。て。魏。の。王。肅。偽。作。せ。る。書。也。借
ま。バ。此。說。を。大。戴。禮。を。取。り。多。翻。案。せ。る。說。も。や。有。ら。む。借
加。く。彼。此。字。推。て。考。ふ。る。尔。子。夏。が。易。字。傳。せ。り。と。云。ふ。說。を。
商。瞿。が。事。實。を。謬。れ。る。よ。を。非。さ。る。の。其。を。商。瞿。字。子。木。と。云
ふ。ト。商。字。子。夏。と。云。ふ。名。字。此。ち。相。似。多。る。を。も。思。ふ。可。き
也。

漢初傳易者有田何何授丁寬寬授田王孫王孫授沛人施
雙東海子魯喜琅邪梁丘賀由是有施孟梁丘之學又有東郡

京房自云受易於梁固焦延壽別為京氏學嘗立後罷

此第十一條也。隋書に經籍志に採まじり。然るに此に皆漢書
に據れる說あり。其に儒林傳に漢興田何授東武王同子中。
雒陽周王孫。丁寬。齊服生。皆著易傳數篇。師古曰。田生授王同。
人而四人皆著易傳也。子中。王同。字也。藝文志云。周氏易傳二
篇。此註云。字。王孫也。服氏二篇の注云。劉向別錄云。服氏。齊人
號。服光。王氏二篇の注云。名。同。丁。同。授。淄。川。楊。何。字。叔。元。元。光
氏。八篇に註云。名。寬。と見え。と。同。授。淄。川。楊。何。字。叔。元。元。光
中。徵。為。太。中。大。夫。藝文志云。楊子。二篇の註云。齊。即。墨。成。至。城
陽。相。師。古。曰。姓。成。廣。川。孟。但。為。太。子。門。大。夫。魯。周。霸。莒。衡。胡。師。古
曰。莒。人。姓。衡。臨。淄。主。父。偃。皆。以。易。至。大。官。要。言。易。者。本。之。田。何。史。記
名。胡。也。臨。淄。主。父。偃。皆。以。易。至。大。官。要。言。易。者。本。之。田。何。史。記
林。傳。も。同。說。あり。終。久。を。要。言。易。者。本。之。於。丁。寬。字。子。襄。梁。人
楊。何。之。家。と。有。り。云。漢。書。字。正。と。為。べ。し。

也從田何受易精敏學成東歸何謂門人曰易以東矣師古曰言丁寬

得其法術以去寬至雒陽復從周王孫受古義號周氏傳作易說三萬

言訓故舉大誼而已師古曰故謂經之旨趣也它皆類此今小章句是也寬授同

郡田王孫王孫授施讐孟喜梁丘賀師古曰繇與繇是易有施孟梁丘之學

由同後類此施讐字長卿沛人也為童子從田王孫受易與孟

喜梁丘賀並為門人謙讓常稱學廢不教授及梁丘賀為少府

事多迺遣子臨門人張禹等從讐問讐自匿不肯見賀固請不

得已乃授臨等於是賀薦讐結髮事師數十年賀不能及詔拜

讐為博士云々此ふふ不其門不出とる數人の易学を繇の

死て抄さば○梁丘賀字長翁琅邪人也以能心計為武騎從太中

大夫京房受易房者淄川楊何弟子也師古曰自別一京房非

者或書字誤耳房出為齊郡太守賀更事田王孫宣帝時聞京

房為易明求其門人得賀賀時為都司空令以筮有應繇是近

幸為太中大夫給事中至少府為人小心周密上信重之年老

終官云々此ふ其子及び門人らの易学を由りて○孟喜字

長卿東海蘭陵人也父號孟卿師古曰時人以卿呼之者言公矣孟卿以禮經

多春秋煩雜乃使喜從田王孫受易孟卿が傳別な儒林傳中より喜好自

稱譽得易家候會易灾變書詐言師田生且死時枕喜傳同門

梁丘賀疏通證明之曰田生絕於施讐手中時喜歸東海安得

此事師古曰同門同師学者也疏通猶言分別也證明其偽也博士缺衆人薦喜上聞改

師法遂不用喜喜授同郡白光少子沛翟牧子況皆為博士藝文

志。章句施孟梁丘氏各二篇。○又有東都京房云々。京房

列傳云。京房字君明。東郡頓丘人也。治易事。梁人焦延壽延壽

字贛。師古曰延壽。贛貧賤以好學得幸。梁王王共其資用。令極

意學。既成。為都史。察舉補小黃令。以候司。先知姦邪。盜賊不得

發。師古曰以其常先知姦邪。卒於小黃。贛常曰得我道以亡身

者。京生也。其說長於災變。分六十卦更直日用事。以風雨寒溫

為候。孟康曰分卦直日之法。一爻主一日。六十四卦為三百六

十日。餘四卦震離兌坎。為方伯監司之官。所以震離兌坎

者。是二至二分用事之日。又是四時各專主之。氣各卦各有占

主時。其占法各以其日觀其善惡也。師古曰更工衡反。各有占

驗。房用之尤精。好鍾律。知音聲。初元四年以孝廉為郎。云々。初

元。昭帝。年。號。元。初。此。間。京。房。一。世。之。履。歷。房。本。姓。李。推

律。自。定。為。京。氏。死。時。年。四。十。一。儒。林。傳。云。京。房。受。易。梁。人。焦。延

壽。延。壽。云。嘗。從。孟。喜。問。易。會。喜。死。房。以。為。延。壽。易。即。孟。氏。學。翟

牧。白。生。不。肯。皆。曰。非。也。至。成。帝。時。劉。向。校。書。考。易。說。以。為。諸。易

家。說。皆。祖。田。何。楊。何。丁。寬。唯。京。氏。為。異。黨。焦。延。壽。獨。得。隱。士。之

說。託。之。孟。氏。不。相。與。同。房。以。明。災。異。得。幸。為。石。顯。所。譖。誅。自。有

傳。京。房。列。傳。云。云。房。授。東。海。殷。嘉。河。東。姚。平。河。南。乘。弘。皆

為。郎。博。士。繇。是。易。有。京。氏。之。學。云。云。子。已。藝。文。志。云。孟。氏。京。房

る京房が易傳を稱ふ物傳はして。其の漢魏叢書中亦收る。易林はと。王謨の跋。焦贛易林四卷。通考本作十六卷。凡六十四卦變。每卦變六十四。總四千九十六首。皆爲韻語。與左氏所載漢書所載相類。今案延壽事具漢書儒林傳。及京房傳中。而本傳及藝文志皆不言著有易林。故或有疑爲東漢後人假託者。今按。顧炎武。日知錄。易林疑是東漢易林。引左氏語。多又往々用漢書中事。云。今言。以て。漢書中此語を多く引きて論ず。然考東觀漢記。孝明帝永平五年。少雨。上御雲臺。自爲卦。遇蹇。以京氏易林占之。繇曰。蠃封穴。天將下雨。沛然。京房延壽弟子。今書蹇。繇實。在震林。則在東漢之初。已用易林占驗。但未著焦氏名耳。今易林の

本文を按ずる。震林の蹇。蠃封穴。大雨將集。と有して。語句や。異なり。何ある由より。若くは。此跋文を引く。と。異本ふや。本漢諸易家說。皆祖田何。惟京氏爲異。黨延壽獨得。有らむ。隱士之說。託之孟氏。故藝文志。易有孟氏京房諸篇。而焦氏之名。反不著。若隋唐志。則固皆題焦贛易林也。經義考云。漢易惟焦氏獨全。而今叢書本。祇作四卷。則又不知孰爲合併云。と言ふ。然る説。れがら委のら。其の上。北京房傳。亦據して。焦贛が易法の趣を。知す。今は易林を考ふる。其旨甚く異な。ゆは。此を。もと。焦贛京房ら。が易法。から。後。周代。を。ゆ。漢。亦。至。ふ。まで。世々。は。占者。亦。傳。來。於。る。八索法の繇文字。集めし書。ある。東漢の頃。と。して。焦京。あ。と。は。易法。と。譌。に。來。ま。る。

物と見え多也。ハ索法と云。上云。如く。每卦六十四爻。爻
の焦贛が易法を。上ある京房傳の注に見えし如く。直日法
よて。災変を專と為。於まバあり。其を玉海。易卦之位。震東
離南。兌西。坎北。為一説。十二辟卦。分属十二辰。為一説。焦延壽
為卦氣直日之法。合二説。而一之。既以八卦之震。離。兌。坎。二十
四爻。直四時。又以十二辟卦。直十二月。分四十八卦。為公侯卿
大夫。而六日七分。之說。生焉。揚雄。大玄。次第。乃全用焦法。其八
十一首。盖亦去震。離。兌。坎。而但擬六十卦。儲はと京房が易傳
耳。と云。るを思ひ合せても知る可し。

此六也。其書。其末。不附録せる。晁公武。説中。昔魯。商瞿。受
易。孔子。五傳。而至漢。田何。何。授丁光。光。授田王孫。王孫。授孟喜。
喜。授焦贛。贛。授京房。房。授河東。姚平。河南。乘宏。由是。易有京房
之學。而傳盛矣。有翟牧。白生者。不肯京氏學。曰。京非孟氏學也。
劉向。亦疑京託之。以上。凡て漢書。所見。事。孟氏。不知。

當時爲何説也。今以當時之書。驗之。蓋有孟子。京房。十一篇。以
大異。孟氏。京房。六十六篇。與夫。京氏。殷嘉。十二篇。同爲一家之
學。則其源。委孰可。誣哉。此亦學者。不可不知也。云。此。文志。藝
孟氏。京房。十一篇。ま。孟氏。京房。六十六篇。お。云。書。の。有
る。據。翟。牧。白。生。劉。向。お。ど。京。房。学。比。孟。喜。お。出。こ。り。
と。云。る。を。非。と。為。と。る。説。れ。る。の。案。お。焦。贛。京。房。が。孟。喜
よ。出。こ。り。を。聞。え。て。同。く。直。日。法。お。り。し。と。思。お。ま。と。也。其。王
謨。が。跋。お。も。此。説。を。稱。し。て。但。考。漢。書。儒。林。傳。有。兩。京。房。其。一
爲。楊。何。弟。子。梁。丘。賀。所。從。受。易。者。其。一。爲。頓。丘。人。受。易。梁。人。焦
贛。者。也。未。知。此。京。房。易。傳。孰。爲。之。也。今。按。五。行。志。所。引。京。房。易
傳。六。十。八。條。皆。言。災。異。與。洪。範。五。行。相。應。延。壽。學。之。京。房。所。作
易。傳。無。疑。如。五。行。志。所。引。易。傳。學。者。亦。不。可。不。參。考。也。と。云。お。

の如し。亦布此跋よいよ一人の京房れらむらと云ふ考
を記せまど其説允當から茲に抄し出さる

て此易傳ふ孔子曰易有四易一世二世爲地易三世四世爲
人易五世六世爲天易游魂歸魂爲鬼易鬼爲繫爻財爲制爻
天地爲義爻福德爲寶爻同氣爲專爻と有ふを謂ゆる世應
法ふて飛伏納甲五行に生死を以て占ふ事は後世謂ゆる
斷易法の祖法なり孔子は易を八索を結けて姫昌父子が
六爻占を用むしかば其變化の博からぬ故ふ斯の如き一
法を案じ遺せるを正傳に外ふ孟喜焦贛京房まで傍傳し
來れる物と見えあり然れど此を大人は易は非び日者の
易なり孔子の早く此易法を用ひし事ハ史記の仲尼弟子
列傳ふ商瞿年長無子其母爲取室孔子使之齊瞿母

請之孔子曰無憂瞿年四十後當有五丈夫子己而果然と有
系下の正義ふ中備云魯人商瞿使向齊國瞿年四十今後使
行遠路思慮恐絶無子夫子正月與瞿母筮告曰後有五大夫
子子貢曰何以知子曰卦遇大畜艮之二世九二甲寅木爲世
六五丙子水爲應世生象來爻生互內象艮丙子口有
五子一子短命顏回云何以知之內象是本子一艮變爲醜
三易爻五於是五子一子短命何以知短命他以故也と有る
を見て知るべし然る弟子傳れる事實孔子家語ふも見え
るはて次々條ふ論ふ如く隋に唐ふ至り費氏の學大に
用られて唐に國學ふを其王弼注を立ふるが其在學業
此上をそ有ま筮ふは京房易をぞ用と正けは是を以て六
典大卜署ふ凡易之策四十有九と有る本注ふ用四十九筮
分而揲之其變有四一曰單爻二曰折爻三曰交爻四曰重爻
凡十八變而成卦又視卦之八氣王相囚死胎沒休廢及飛伏

世應而使焉云々とあり。是より後、断易天機あど云ふ陋
 する事あるを古今の易学者流む。こゝを信じて其俗法に從
 事して其を俗法としも知らば有るハ憐むべき事ふこそ
 彼郝敬が讀易瑣言ふ。夫易聖人所以精義窮理利用安身以
 崇德者也。操心制行隨時處中懼則思占疑則思斷。即是聖人
 所以無大過者。舍此無餘術矣。若夫占天測地按節數時雖算
 極微塵虛做精神何所用之。蓋天下唯理可御數數不能達理。
 京房郭璞非不精也。而挾智用數竟以滅身故得其要一奇一
 偶而消息已具不得其要。雖以焦贛之四千九十六何益于成
 敗之數哉。と云ふを信ふ然る事ハハ。

漢初又有東萊費直傳易其本皆古字號曰古易文以授琅

邪王瓚瓚授沛人高相相以授子康及蘭陵母將永故費氏
 之學行於人間而未得立

此第十二條也。隋志云。聽て前條を連續せる文ハ。此徒の
 事も前漢の儒林傳云。費直字長翁東萊人也。治易爲郎。至單
 父。令長於卦筮亡章句。徒以彖象系辭文言十篇解說上下經。
 琅邪王瓚能傳之高相沛人也。治易與費公同時。其學亦亡。章
 句專說災異。自言出於丁寬。傳至相。相授子康。及蘭陵母將永。
 康以明易爲郎。永至豫章都尉。繇是易有高氏學。高費皆未嘗
 立於學官。と見えよ。藝文志云。漢興田何傳之。訖于宣元。有
 施孟梁丘京氏列於學官。而民間有費高二家之說。宣元と云

元帝多いひ費高と云。費直と高相とを云ふ也。劉向以中古文易經校施孟梁丘經或脫去也。師古曰中者天子之書也。言中以別於外耳。唯費氏之經與古文同と云。

此高相が子に高康と云ふしを彼王莽が時東郡を云ふ處に兵災の起るべき由を豫言私語して衆を惑はせしむる咎を受て斬殺せらるる者なり。抑かく會易易學を長るる徒災異に事坐して誅を受るが多加るを佗に災異をばふ死不知まども己が身の災異をば豫言知ると能はざる。然ま尤諺云會易師己が身に事字知べと言ふ也。此等此事をゆ云ふも有る處し。其む上に出せる京房この高康も災異を語る咎を受けて牢獄に囚はれ既命を失むむと為けるを辛くして助かす。晋世郭璞と云る人おど

も其事ゆゑに殺さるる此はて後漢に儒林傳云田何傳易授丁寬丁寬授田王孫王孫授沛人施讎東海孟喜琅邪梁丘賀由是易有施孟梁丘之學又東郡京房受易於梁固

焦延壽別為京氏學。前條の本文に此文も據。又有東萊費直傳易授瑯邪王橫為費氏學。注云前書橫作璜字平仲。本以古字號古文易。

又沛人高相傳易授子康及蘭陵毋將永為高氏學。施孟梁丘京氏四家皆立博士。費高二家未得立也。今此本文に是文字

取まざるなり。然ふも此文前書云と有まど前書此文ハ上

ふ文の同かりし由にて其本の古文を正しと云ふも非ざる也。此文も本以古字號古文易と云るに違ふ也。隋志もやがて其誤を受とり又費直と高相をハ元と別學なりを隋志に費直と王璜と傳云。王璜と高相と傳云と云

と云るも前後漢書を鹿
畧に見る誤りかし。

後漢施孟梁丘京氏凡四家竝立而傳者甚衆陳元鄭衆皆
傳費氏學馬融爲其傳以授鄭玄玄作易注荀爽又作易傳

此第十三條も隋書に經籍志を採るる其の後漢に儒林

傳易學者流此條の終に建武中范升傳孟氏易以授楊政

而陳元鄭衆皆傳費氏易其後馬融亦爲其傳融授鄭玄玄作

易注荀爽又作易傳自是費氏興而京氏遂衰と有るを據れ

る文を見えぬ也漢書に載り中にも馬融鄭玄ハ傑出の

人れらるが鄭玄は馬融の弟子なり十餘年從ひて其固る歸

東矣を謂たりし人あり七十四歳に春夢り孔子の靈を告て

起起今年歳在辰來年歳在巳と云ふと見て既る寤て

識を以て之を合せて當年に命の終るべき事を知りて其

年の六月に至りて七十四歳を死する事あり其傳を見

えたり其委しき事也後漢書に就て見ゆしおろ其儒林傳に注丹世傳孟氏易建

武初爲博士作易通論七篇を授也建武を光武帝のけり東

觀漢紀に馬融著易解頗生異說爽著易傳據文象承應會易

變化之義以十篇之文解說經意由是袞豫之言易者咸傳荀

氏學而馬氏亦頗行於世と見え隋志に漢司空荀爽注十一

卷荀爽九家注十卷梁有馬融注一卷鄭玄注九卷外ど見えぬ也九

此事に玉海に序錄云荀爽九家集注十卷不知何人所集稱

荀爽者以爲主故也其序有荀爽京房馬融鄭玄宋衷虞翻陸

績姚信翟子元爲易義注内又有張氏孔穎達が正義に易緯

朱氏並不詳何人と有るべし孔穎達が正義に易緯

○三易由來記下
○二十九

ふ如を。鄭玄は緯書を好める人あり。乾鑿度を始也。易緯は
これ其注を作多し。其を玉海に。中興書目を引交て。易緯案
隋志八卷。鄭玄注。梁九卷。舊唐志九卷。宋均注。唐志宋衷注。康成
或引解經。今篇次具存。宋均不傳。李淑書目九卷。凡乾鑿度稽覽圖
通卦驗各二卷。辨終備。是類謀。坤靈圖各一卷。今三館所藏。乾
鑿度。通卦驗。皆別出爲一書。而易緯止有鄭氏注七卷。稽覽圖
第一辨終備第四。是類謀第五。乾元序制記第六。坤靈圖第七。
二卷三卷無標目。と載せるが如し。此を今之凡全書傳は也
武英殿此叢書中に出
抑お此易緯の書類を。周此末世。孔子の易學を入し以
來。その傳受せる輩は次々ふ。記し傳子し内書と見え。何

きも作者詳れらば。中尔孔語も多く有れど。信られぬ説を
殊多く。よこ中よ正し古説も少からぬを。熟く視て擇
び取らざる書類等あるを。舊く劉向父子の七録。及び班固が藝
文志に其目録を以て。俗に固頑れる儒者あり。一向に捨
て取ざる倫も有るハ。凡て緯書類を往々ふ。其立ふ道は
破綻をなほ説等此有るが故に諱惡ふまは。其を拘るは
じき事ふまは。此を少の云む上より引とる通卦驗。象文
辭。王命の瑞字繫とりと云ひ。乾元序制記
に。乾卦の爻辭。姤昌父子三人が履歴を繫とりと有る類
を。皆彼らが奸意の破綻と成るを採らば。然まは其目録に緯
書類の目録に記し出せる事案。班固らが出せる書目。見
えざる事跡の多加るを。熟く視まは。多くを緯書類に出

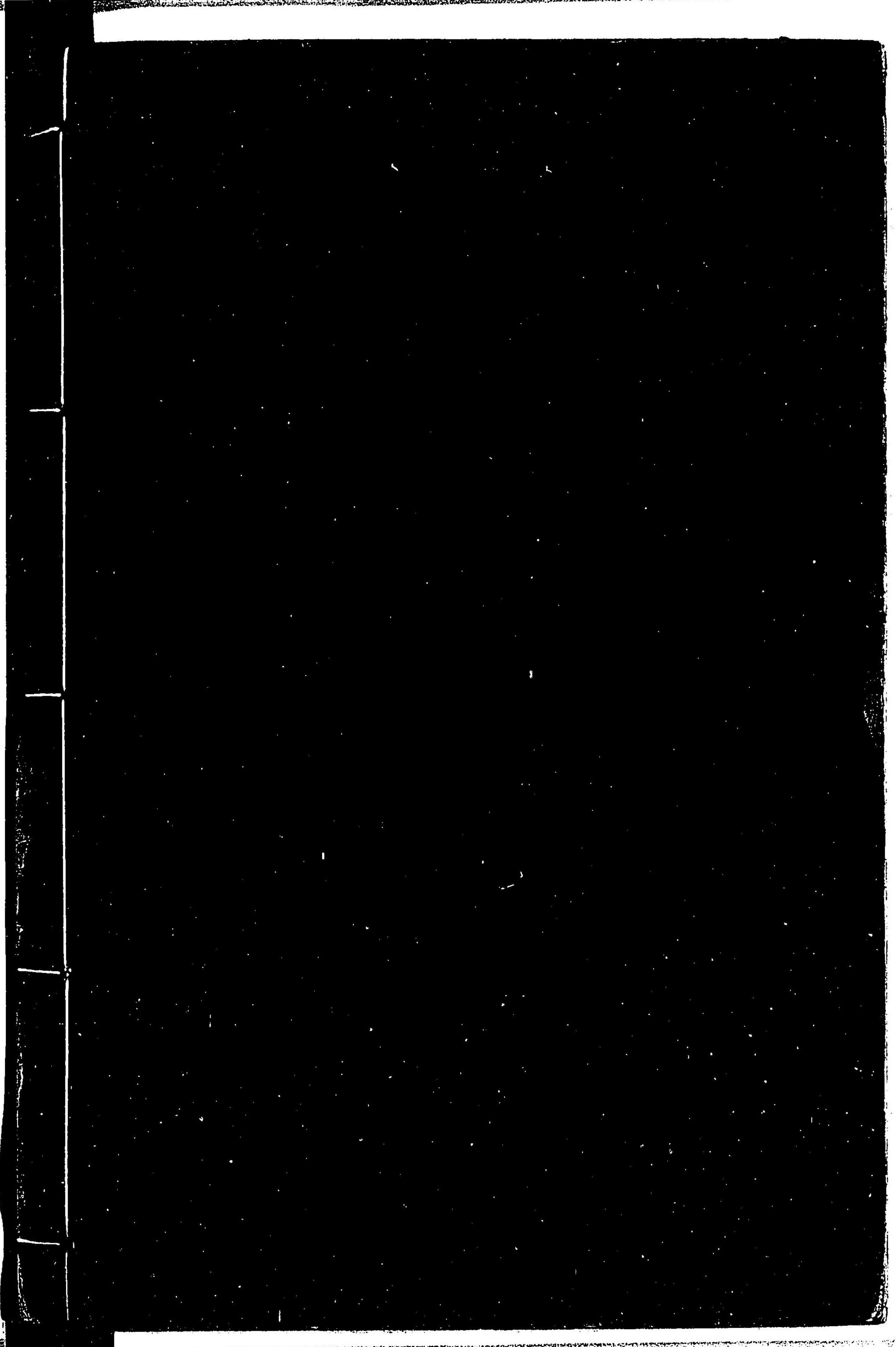
爾說等如る也。史遷が疾く見て採撰せるあり。其を自序の
 細史記石室金匱之書と云ふも知る。彼連山歸藏の
 書目も藝文志に見えざまほ。漢世も在りし事を既始
 辨ふるきあり。猶緯書類の事也。おと經籍志も魏代王肅王
 赤縣太古傳も往々云ふべき。彌竝爲之注自是費氏大興高氏遂衰梁丘施氏高氏竝亡於
 西晉孟氏京氏有書無師梁陣鄭玄王弼二注列於國學齊代
 唯傳鄭義至隋王注盛行鄭學浸微今殆絶矣とも有也。亦
 易此由來就て是と也。後此事も歴史は志類を更れ也。
 諸書も多く見え少く論はま欲しき事必有まほ。易學先
 生等既く辨ずるはみれらば古易もえはま多用れ也
 所爲れまは是も筆を閣くもあむ。

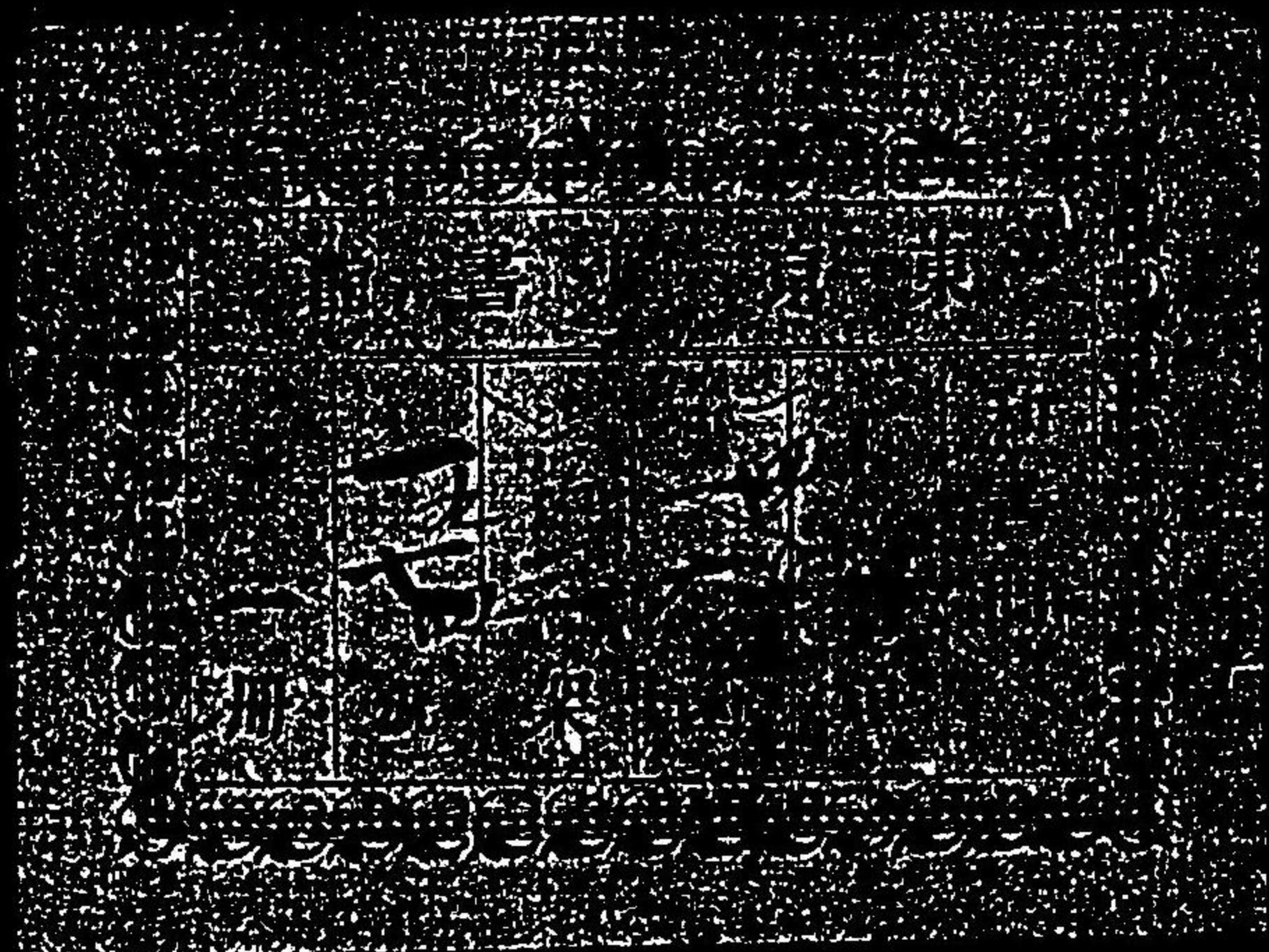
彫工 東京神田木邨嘉平房義
小柳町三丁目

伊吹迺屋先生及門人著述刻成之書目 塾藏版

- 古史成文 神代部 二卷 ○古史徵 神代部六冊 開題記五冊 十一卷
- 古史傳 自初卷至北八卷 上秩刻成 ○古史本辭經 五十音 義訣 四卷
- 神代系圖 折本箱入 一帖 ○同 小折本 一帖 ○同 桂軸料 一帖
- 靈能眞柱 二卷 ○神拜詞記 一帖 ○玉多須喜 味 十卷
- 太元圖說 石指 一幅 ○古道學神号 同 一幅 ○万聲大紗譜 一幅
- 弘仁歷運記考 二卷 ○神字日文傳 二卷 ○疑字篇 日文傳附録 一卷
- 皇國度制考 二卷 ○祝詞正訓 二卷 ○大祓詞正訓 折本 一帖
- 天津祝詞考 一卷 ○古道大意 講本 二卷 ○靜乃石屋 同 二卷
- 皇典文彙 三卷 ○童蒙入學門 一卷 ○入學問答 附著述書目 一卷
- 牛頭天王曆神辨 一卷 ○盤宗仲景考 一卷 ○古今妖魅考 三卷

○鬼神新論	一卷	○春秋命歷序考	二卷	○出定笑語	講本 一卷
○悟道辨	講本 二卷	○伊吹於呂志	同 二卷	○俗神道辨	同 四卷
○大道或問	一卷	○木匠祖神号	石 一幅	○德行式	同 一幅
○立言文	同 一幅	○武道祖神号	同 一幅	○鑿祖神号	同 一幅
○赤縣歷代尺圖	一枚	○荷田翁啓文	一卷	○太界古易成文	一卷
○赤縣太古傳成文	一卷	○校訂古語拾遺	一卷	○	
○宮比神御傳記	一卷	○天滿宮御傳記略	二卷	○日女島考	一卷
○神守彙	一卷	○古學二千文	同 一卷	○草木撰種錄	一枚
○神德畧述頌	一卷	○古道訓蒙頌	一卷	○叶古要略	一卷
○喪儀略	卷	○葬事略記	卷	○石指類	數種
○祭典略	一卷	○祭文例	卷	○千字文	一卷
○神事略式	一卷	○古史年歷編畧	一帖	○西籍慨論	講本 三卷





013114-000-6

140-94

三易由来記

平 篤胤 / 著

刊年不明

AAK-0443

